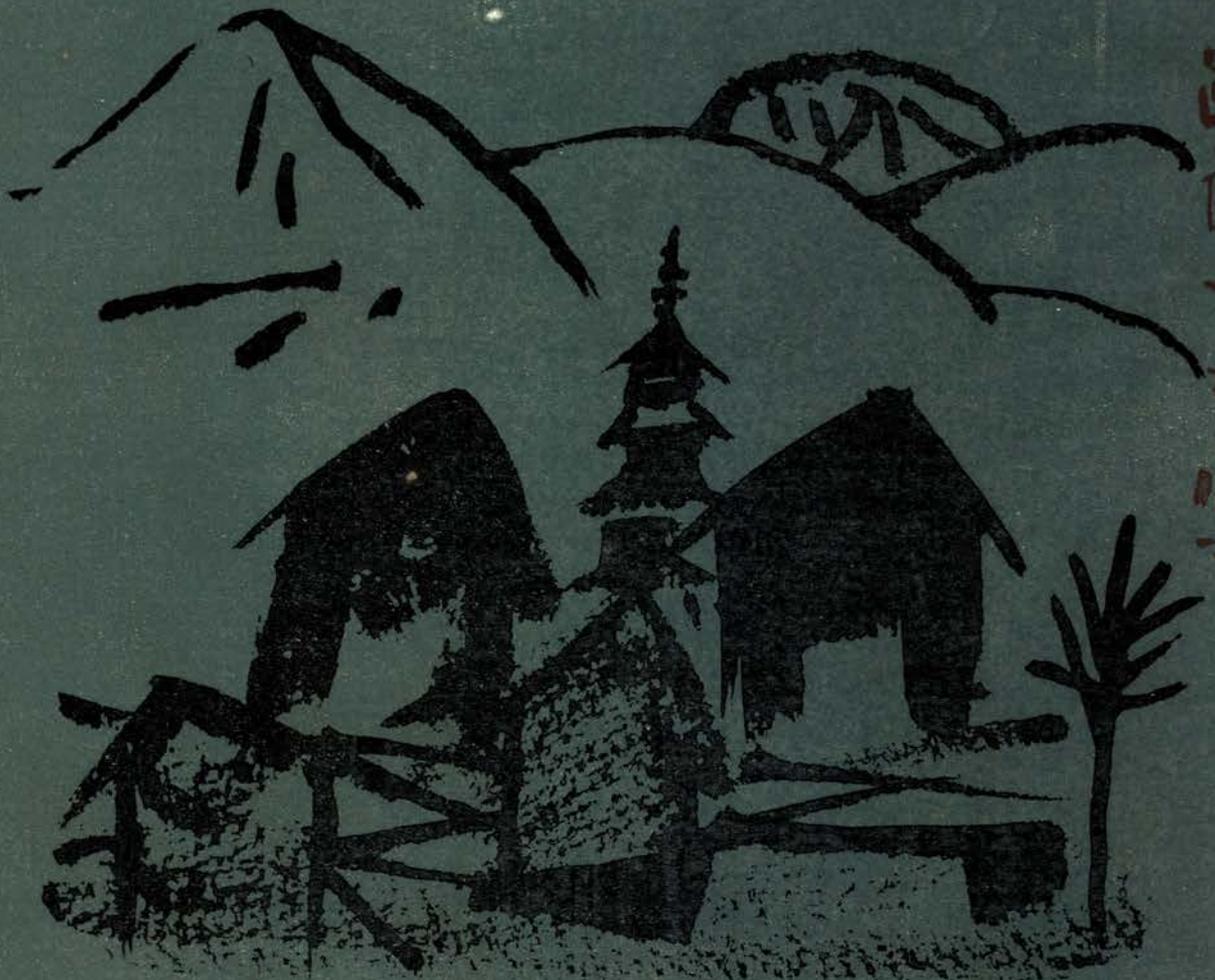


川柳の雑記

No. 429

Pensoj flugas trans la land - limon
THE SENRYU ZASSHI

二月号



麻生路郎 ☆ 主筆

川柳雑誌社主催

3月本社句会

話術
つふし値
補欠
おとし穴

本社二月句会

暖かい会場で楽しく作句をいたしましょう。
最近は特に新人の方がふえました

日時 二月七日(木) 午後六時
会場 自安寺(「211」一四七八番)

大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題 「ふだん着」(三句) 麻生路郎選

(路郎選に限り七時半〆切り)

「ムード」(三句) 戸田古方選

「亀」(三句) 真鍋一瓢選

「名画」(三句) 菊田いさむ選

席題 三題(当日発表)

柳話 北川春葉

呈賞 ☆各題天位・各題天位から路郎選により不朽割賞

会費 百円

幹事 紫香・いさむ・南宗・文秋・唐佑・八郎・

与呂志・清人・水洞・すゝむ・薫風子・柳

安子・舟遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(〆切二月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪(671)六〇八一

日本盛酒坊

和やかにまず一杯!

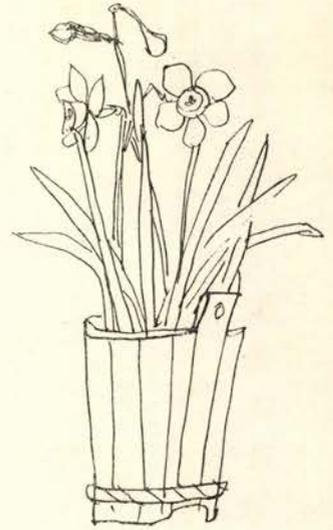
東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰



灘の清酒
ニホンサカリ

不朽洞句帖

麻 生 路 郎



冬山へ頭突すきをもつてゆく阿呆

よろこんで死んだ冬山霽れわたり

ちちの涙ははの涙冬山は聳ゆ

搜索隊いらぬおせっかいにも思え

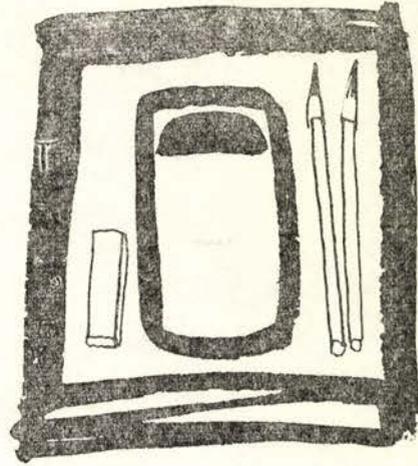
冬山で死にたい奴は死なせるさ

山で死ぬその無暴さが羨し

白骨白骨松風の音のみがする

川柳雑誌十二月号目次

★柳 柳 壺……………(46)	★柳界展望……………(38)	★不朽洞句会から……………(39)	▼ペン <small>の</small> 散歩……………(46)	★現代柳人録……………(32)	川柳書架……………(29)	傷 心 篇……………(18)	麻生路郎……………(18)	「犯人はあ奴だ」——ストーリーと川柳……………(33)	土井文蝶……………(33)	チーコとコロ……………(39)	東野大八……………(25)	★短詩文学文庫だより……………(39)	★不朽洞の人々……………(39)	すゝむ氏……………(39)	不朽洞賞の圭井堂氏……………(35)	不二田一三夫……………(35)	扇 屋 花 扇……………(34)	富士野鞍馬……………(34)	★ひとり言 与呂志……………(18)	★新年句会に不朽洞賞を旅風……………(18)	川 柳 塔……………(6)	麻生路郎……………(6)	同 舟 近 詠……………(11)	諸 生 路 郎……………(11)	近 作 柳 樽……………(20)	北川春路……………(20)	金 泥 集……………(35)	麻生路郎……………(35)	各 地 柳 壇……………(41)	麻生路郎……………(41)	★柳界展望……………(38)	★不朽洞句会から……………(39)	一路集 「神 前」……………(36)	中島生々庵……………(36)	「のんびり」……………(46)	小西無鬼……………(37)	藤井明朗……………(37)	★柳 柳 壺……………(46)	★不朽洞句会から……………(39)	▼ペン <small>の</small> 散歩……………(46)	不朽洞句帖……………(3)	野尻 弘……………(3)	川柳作家の心構え……………(27)	八木摩天……………(27)	名句と難句……………(4)	麻生路郎……………(4)	紙 鷲 揚 げ……………(18)	築山快夢……………(18)	杉浦重剛先生と川柳……………(12)	阿部佐保……………(12)	哀感と善意—句集「有情」—……………(28)	早川清生……………(28)	大阪と川柳……………(16)	戸田古方……………(16)	ふり返って……………(23)	直原七面山……………(23)	二人道中由縁傍……………(30)	中島生々庵……………(30)	旅行 苦 吟……………(20)	戸田古方……………(20)	病氣と川柳……………(14)	北川春路……………(14)	★大万川柳「女性」発表……………(40)	麻生路郎……………(40)	句評リレー……………(26)	柴 方 大……………(26)	雄々……………(26)	宗太郎……………(26)
-----------------	----------------	-------------------	----------------------------------	-----------------	---------------	----------------	---------------	-----------------------------	---------------	-----------------	---------------	---------------------	------------------	---------------	--------------------	-----------------	------------------	----------------	--------------------	------------------------	---------------	--------------	------------------	------------------	------------------	---------------	----------------	---------------	------------------	---------------	----------------	-------------------	--------------------	----------------	-----------------	---------------	---------------	-----------------	-------------------	----------------------------------	---------------	--------------	-------------------	---------------	---------------	--------------	------------------	---------------	--------------------	---------------	------------------------	---------------	----------------	---------------	----------------	----------------	------------------	----------------	-----------------	---------------	----------------	---------------	----------------------	---------------	----------------	----------------	-------------	--------------



川柳 名句と難句

麻生路郎

あったそうだ。九日を宵宮、十日を本祭り、十一日を残り福と言っている。福をもらいに行つて、落としてくる人もかなりあるようだ。この句は大阪人ならとげこめる句だ。

〔四四三〕

ラジオ寄席中学生はナガラ族

(春 菓)

中学に通っている息子や娘に「勉強をしろ」と言うと、勉強をするから部屋が欲しいと言ふ。みなと一緒に勉強するから勉強がしにくいのであろうと、ムリ算段をして部屋をつくらせてやると、ラジオのスィッチをひねって、ジャンジャン、ジャズ音楽を聴いている。そんなことで勉強が出来るかと覗いて見るとジャズを聴きながら勉強をしていた。斯ういう勉強の仕方をする若者たちをナガラ族というのである。この句は中学生がラジオ寄席を聴きながら勉強しているのだから、秀れた川柳だといはれないが、ナガラ族などという言葉を解説しておくために例句として載せることにした。

ジャズを聴きながらでないと勉強が出来ない。つまり一方でなにかの機能を働かせていないと精神の集中が出来ないというので、日本医大教授の木田文夫が特にナガラ神経症と名づけてから一般化し、教育界でも問題にされているそうだ。現にこうした勉強方法をとっている若者たちの中にも秀才がたくさんいるそうだが、この患者をナ

〔四三九〕

蜂に似た少女の腰がとんでくる

(水 客)

技巧の句だが巧い。よく少女というものを観ている。特に少女の腰に焦点を当てたところがいい。蜂との相似性は動かない。ようにというような文字を使わないで、相似性を表現したところに作者の手腕があると思う。「腰がとんでくる」で少女が生きて生きている。

〔四四〇〕

独り旅夕陽に西をおしえられ

(旅 風)

静かな句だ。淋しさが、ひしひしと迫ってくる句だ。

さしてあてのない独り旅である。夕陽が落ちていくのを見て、「ああ、こっちが西

か」と思ったのを「西を教えられ」と詠んだところにこの句の妙味がある。川柳の技巧とはそんなものだ。僅かの技巧が句を生かす一例ともいえる。

〔四四一〕

療養所一年 もうええのんができたらし

(杜 的)

療養生活も一年近くになってくると、そろそろ散歩も出来る。療友との言葉を交わす機会もふえる。そのうちには異性の療友もいる。何しろひまがあるんだから、いつとはなしに恋が芽生えるのも無理からぬことといえよう。

この句の「もうええのんができたらし」

はその間の消息を語るものである。しかし、そのことごとくが実を結ぶわけではない

〔四四二〕

神様も砕けて呼べる戎っさん

(旅 風)

大阪今宮の戎神社は商売繁昌の守護神だといふので、なかなか人気のある神様だ。大分以前から、ここも大阪だが、今宮村といわれるので、大阪の中央部や北方面から参詣した人たちは裏手から境内に這入り、

「戎っさん参りました」と小槌を叩くので、戎っさんはツンポヤということになされている。いずれにしても、大阪の庶民の信仰した神様だけに戎っさん戎っさんと、しごく心安く呼びならされている。今年も正月九日、十日、十一日の三カ日間のお賽銭や福笹やお守札の水揚げが二千五百万円も

あったそうだ。九日を宵宮、十日を本祭り、十一日を残り福と言っている。福をもらいに行つて、落としてくる人もかなりあるようだ。この句は大阪人ならとげこめる句だ。

ガラ族と言っているのである。

〔四四四〕

姉さんが嫌なら私がと妹

(七面山)

見合写真をながめて、シユンジュンして
いる姉に、
「姉さんがいやだったら、わたしが嫁って
もいいわ」

と、言うのである。結婚を一つの取引だと
割切っているのも、今どきの若い女性には
珍らしいことではない。こんな女性心理も
軽い穿ちとしてうけとれるほど時代はダン
ガン変ってゆく。それがいいことである
か、わるいことであるかは別の問題であ
る。

〔四四五〕

住友も華を作る事覚え

(いわを)

財閥住友といえは大したもので、世界中
に支店出張所を持った貿易商社であった。
ところが終戦後、G・H・Qの手で、住友
勢力の分散政策が行われたので、その後の
住友の営業方針に異変があった。今までは
問題にもしていなかった薬の方へまでも手
を出すようになった。

作者はそれを面白く思ったので「薬を作
る事覚え」と詠んだのである。この句の
場合「住友も」の「も」がよく利いてい
る。

〔四四六〕

男みな痴漢にみえてくるきりよう

(潮花)

地下鉄の電車の中にさえ痴漢があらわれ
るようになった。手を握ったり、膝をおし
つけたりするくらいではおさまらぬらし
い。この句はそうした特定の場合の痴漢を
詠んだものではなく、男という男がみな痴
漢に見えてくるというほどの美しさだと、
第三者が女性の美容をたたえた句である。
句の形式は「男みな阿呆に見えて売れ残
り」(阿茶)を模した観があるが、内容は
違っている。しかし「男みな阿呆に見え
て」の句のあることを知って「男みな痴漢
に見えて」と表現することはなるべく避け
た方がいいだろう。

〔四四七〕

齒くきまで見せて候補者手を振り

ぬ

(三窓)

トラックの上の候補者かも知れない。街
行く人々がみな一票に見える候補者にとっ
ては、
「どうか、よろしく」
と齒くきまで見せて、大きく高く手を振っ
たのである。

こちらはそれに答えようとはしないで、
冷ややかに眺めているのも面白い。何ん
でもない、ありふれた情景を巧みにキャッチ
している。

〔四四八〕

地球改造あっちもこっちも山削る

(季贊)

科学文明は自然の美しさを惜しみなく打
ち毀すものだ。国鉄は新幹線をつくるこ
とによって野も山もふみにじる。電力会社
は山村をギセイにしてダムをつくる。斯く
して、地球は夜を日にいで改造されてゆ

く。作者は科学文明のとどまるところを知
らぬ破壊力におののいたのであろう。句の
表現が単純でラフなものも、この句にふさ
わしいと思う。

〔四四九〕

赤い血青い血ネオンのような人体

図

(花村)

人体図の中でも、河川の流れのような血
管系を、赤や青の色彩であらわしているの
を見ると、子ども心に何んとなくぶきみに
感じたものである。

ところが、この句は、赤い血や青い血で
彩どられているのを、ネオンのように眺め
ていると詠んでいる。これは大人の感想で
もあるが、その間に時代の流れも汲みとる
ことが出来ると思う。

〔四五〇〕

雪がふる祈る私の手へ髪へ

(夢虹)

お祈りをする場所はハッキリしないが、
ケイケンな態度の作者の手へ、髪へハラハ
と雪がふりそそいでいる情景は一篇の叙情
詩としてうけとれるが、川柳味
は稀薄である。でも捨て難い句
だ。

〔四五二〕

代書させといて器用貧乏

(無鬼)

「ああ、エエとこへ来た。キミ
は字が巧いから、コレを一寸書
いてくれ」
と、よく頼まれる。
頼まれるから、どんなもので



「お買物」
は近鉄で!

近鉄
アベノ77-8331
上六77-3331

も書く、書くから自然と熟練する。勢い代
書さされる数が殖える。それを取りまいて
見ている連中の言うことがいい。
「お前は器用貧乏や」と。
これぐらい穏やかならぬ言葉はない。ム
ツとするのももつともである。この句、詩
美はないが、「何や」というレジスタンス
によって生かされた句だ。
〔四五二〕
プラットにひとりも人が居ぬ寒さ
(一傘)
まだ夜の十時を過ぎたばかりだが、屋一
つ見えぬ小駅のプラットに佇立して、列車
の来るのを待つ姿はわれながら、ぶきみな
ものだ。なかなか時間が経たない。二十分
も待てば小一時間も待ったような気がする
ものだ。
フト、プラットを見渡すと、自分以外
に、人影が見えない。アア寒いとおもわず
首をすくめたのである。
小駅といっても、いつも五人や十人の乗
客が、そこにバラバラと散在しているも
のだ。それが誰れひとり居ないことに気づ
くと、急に寒々と感じたのである。少しの
芝居もない淡々とした句だ。



川柳塔

停年になつても寄附をせがみに来

無駄骨を打算に入れぬ若きなり

堺市 吉田圭井堂

鳥取市議會議員に当選

鳥取市 河村日満

頼みには来るがお札に来ぬ時世

平均が伸びて不惑の頼りなき

西宮市 若本多久志

お寺もう葬式の外来てくれず

防府市 長野井蛙

勝譲る気持が石を持って消え

教えない道德師の恩など知らず

資本家が組織を二つにして噛ませ

合掌をする手で人の靴も提げ

岡山県 直原七面山

頼杖で妓切れ術を考える

三人の子に再婚をすすめられ

婚約成つて彼女浪費をたしなめる

老妻とキッスよそごと思いつつ

マッチに似てすれば火の出る女なり

大阪市 西森花村

十二月お腰が痛い年となり

子供の面昏風船持っている

当選御礼大地に足のつかぬまま

くしゃみしたように東京の水ときれ

倉敷市 木村千容

地の塩となる気余生もまた来し

何と申しましようかアッ腕がないと

倉敷市 田垣方大

雪でも降らな飲む口実のない二月

上役が来ると持論がすぐ変り

新課長先きにおはよう言っている

大阪市 真鍋一瓢

不足たらたら父が運んだ餌で肥えて

芋虫に似てて不犯の女史と云う

痴情の線探る刑事のうら若く

爪弾きでやとなはくどい客と知り

十二月駄法螺吹いても淡やまれ

米子市 小西雄々

挨拶で八方美人だとわかり

円満な暮しへ邪教つけこめず
女連れめだたぬ位置へ席をとり

六十一このエンジンもガタがきて
あれでも課長かと思う若きなり

大阪市 正本水客

肉親という気がしない喋りよう

金だけが頼りと口に出してみて

傘かりてお通夜の朝を帰ってき

大阪府 西いわを

薬鶏頭分譲地には赤すぎて

母の採点をボーイフレンドにさせる

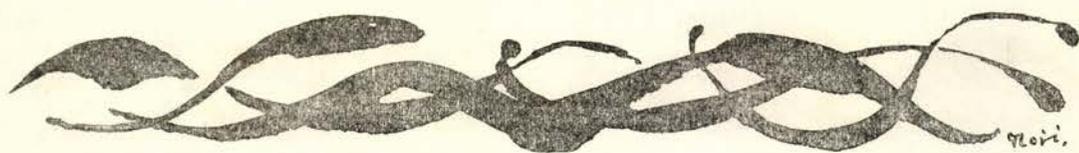
大阪市 北川春巢

ジャパニーズスマイルお化粧似合う

病名も云わずに命保証され

高校卒業三十年クラス会

お互いに眼鏡はずして名乗り合い
ワイマル羽佐閻柳葉



寒がりへ山陰の冬ながすぎる

大阪市 山川 阿茶

薬局で強壯剤の名を忘れ

岡山市 浜田 久米雄

斜陽化した学術会議はソデにされ
放尿のところか草が青々と

ストライキ社長になった日を思い

投げキッス笑わんといってお月さん

二次会がやまやまやまで疳をたて

毅然たる松は男の立姿

梯子酒最後は一人で借れるとこ

大阪市 金井 文秋

腐っても鯛塩漬で売り出され

岡山市 逸見 灯竿

集金の他はやもめの家に来ず

どうしてもジャズになじめぬずれを知り

柿食べて冷えを案じる齢になり

おごられる方が手品でもっている

加賀市 那谷 光郎

元且も勤めて来ます靴の艶

出雲市 尼 緑之助

十二月子の泣く声へ振り向かず

仕立物しますたつきの女性文字

客を釣るクイズの鍵はすぐわかり

鳥取市 大西 八歩

嬢ちゃんが横すべりして席をくれ

鳥取市 杉谷 湖山

地球儀を置いて飛行士肺を病み

焼場までやっぱり個性もって行き

対等で息子とビール飲む自由

秋の風京都へ行ってみたくなり

交通禍大もうっかりしておれず

河村日満氏市議当選

奈良県 飯降 白香

偉い人に育てた母の一人ぼち

当選の酒が正月までつづき

執拗にからんだ葛も枯れていき

日本一えらい母です敏だらけ

たわむれの恋は許さじ見据えた瞳

慕情ひしひし切手貼り忘れ

岡山県 田村 藤波

週刊誌角折れたまま一人旅

上役の芝居話も聞かされる

岡山県 田村 藤波

はからざり孫アメリカさんと文通す

京都府 大鶴 喜由

高槻市 山田 季賛

子供連れトイレに近い位置を占め

岡山市 服部 十九平

すねたよに田甫が残る新開地

十二月子の泣く声へ振り向かず

岡山市 服部 十九平

元且も勤めて来ます靴の艶

岡山市 服部 十九平

銀行は昼食をしたようになし

十二月子の泣く声へ振り向かず

岡山市 服部 十九平

何も彼も棚へ上げさす孫が来る

十二月近寄り難い父になり

十二月近寄り難い父になり

腐っても鯛塩漬で売り出され

集金の他はやもめの家に来ず

岡山県 福島 鉄児

腐っても鯛塩漬で売り出され

集金の他はやもめの家に来ず

岡山県 福島 鉄児

腐っても鯛塩漬で売り出され

集金の他はやもめの家に来ず

岡山県 福島 鉄児

髪分けて髪の薄さを見ていたり

旅好きか知らぬが元日もうおらず

岡山県 林野 甞光

配達をする人の身になって書き

旅好きか知らぬが元日もうおらず

岡山県 林野 甞光

配達をする人の身になって書き

旅好きか知らぬが元日もうおらず

岡山県 林野 甞光

春を待つところこたつの温味を出

陽にほしたふとんにほのか私の臭して

岡山県 林野 甞光

薬局で強壯剤の名を忘れ

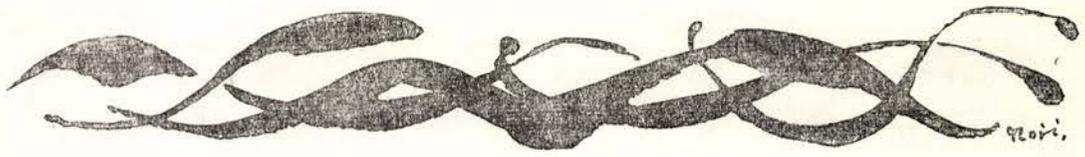
放尿のところか草が青々と

岡山県 林野 甞光

斜陽化した学術会議はソデにされ

放尿のところか草が青々と

岡山県 林野 甞光



京都市 松川杜的

庭石に昔のあるのを見てくれず

喜怒哀楽又よし一管の音に託す

鳥取市 森本法泉子

日満氏市議当選

夜が明けたので当選はねるときめ

妻入院八カ月

看護婦の夜勤今日から毛糸を着

定年近し

ふりかえる山の起伏のなつかしき

松原市 小池しげお

名優以上胃癌の母へ気を使い

癌の母へ来たオタスケに頭下げ

十一月二十三日母逝く

百姓の母へ勤労感謝の日

臨終へサンソブクブクと泣き

御詠歌は母の苦勞をうたうた

孝行の最後は癌へ火をつける

堺市 高崎雄声

身分が過ぎてライバルにもなれず

島根県 藤井明朗

親心知らずスキーにのぼせとり

湯の街の別れ互いにうそをつき

もう老万円あればと思う年の暮

岡山県 永松東岸

親戚のように質屋で工面をし

恋愛に向かない顔よと割り切られ

汚職でもしてるんやろと羨まれ

栄養を酒でとってるよな酒豪

倉敷市 野田素身郎

胃腸薬飲んで十二月に備え

金策に出れば師走は雪となり

大阪市 清水望峰

娘の唄に父よあなたは弱かった

電化して祖母のほしがる桜炭

大阪市 伊達堰子

なが尻の用は知れてる年の暮

大阪市 不二田 一三夫

手形割るすべさえ知らず孫もあり

死亡届けガム噛みながら受理される

香奠の中味借りとく暮らし向き

女からの手紙へ老眼鏡をかけ

三流紙だけが作家と書いてくれ

青屋市 丸川初甫

身の破滅知ってて毘が面白く

すんだから破る矢印かなしませ

目の前で細かく破る借書

岡山県 池田古心

メーファーズなどと暢気者悟り

仕事せぬ妻とはなりぬP・T・A

三チャンの農業ベタバタサロンパス

東京都 石居高志

自信ない顔で代筆引き退り

亡妻三年忌に(二句)

俺だけが生きてかれこれもう二年

この通り約束果す子等を連れ

田園都市 小平

市になってさて警察署電話局

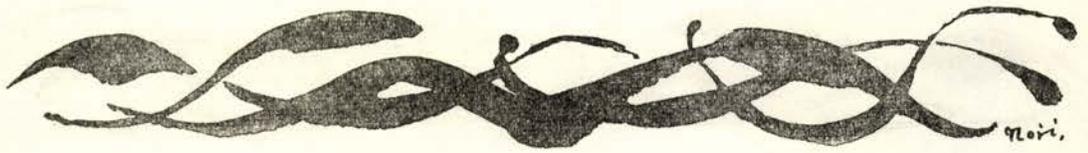
大阪府 早川清生

朝の鳥瞰動くものみな大阪へ

家建てた冬にめっきり老いを知り

養子また勉強せぬ子を叱る役

大阪市 西田柳宏子



精一杯六段吹いてお正月

大阪市 橘高薫 風子

もうキッス予定終了紅を塗り

電話交換一年歳

元日の駅前広場広場となる

息抜きの酒場で労組と顔が会い

元旦の挨拶モシモシから始め

鼻の孔耳の孔まで元旦也

平田市 久家代仕男

ボーナスの出た顔で来る百貨店

火の消えた炬燵の上の置手紙

何もかも電化夫に暇がなし

8ミリを買って正月待ちかねる

秋空に遠い景色を思い出し

ニコヨンにジungalベルの夢もなく

堺市 辻 圭 水

椿落つ思いを断てというごとく

ボーナスの足を捉えたジャズ喫茶

新幹線こんなに土地があったのか

悼香林若菜夫妻

大阪市 本多 柳志

オールドミスせて原色着て暮し

妻の手をこんどはわしがひいて行く

ポストまで来てぐらついている自信

生徒等のはやり言葉を教師まね

悼大山竹二氏

西宮市 樋口 舟遊

加賀市 中松 恒雄

黄の花火黄の菊となり悲をかこむ

裏向きにシャツを着ていた十二月

盗難御注意看護婦引抜かれ

奈良市 宮口 笛生

なまぐらの庖丁で鯛の骨たたく

数の子の味知らぬまま子は育ち

駐在所の前で一円玉拾い

新潟県 高野むじな

待ち人が来たり煙草を靴で踏む

米子市 城内 吾柳

子をあやす顔親馬鹿と思えども

大阪市 児島与呂志

上役の過去をさかかに飲むビール

三枚の中にもせ札たしかめる

金着てるような晴着の金糸なり

大阪市 西川 晃

つき合いにやる斗争も十二月

西宮市 小浜 牧人

年の瀬をただつくねんと古本屋

大阪市 石倉 旅風

大金を持った夜汽車がのろ過ぎて

釜ヶ崎風景

新時代夢もカラーで見せてくれ

別居した二階は雨戸締めたまま

飲んで食うて「さあ警察へ連れていけ」

風邪をひく暇だけあった十二月

黒帯を締めた昔を言うて病み

神戸市 仲どんたく

俺をどう訓えなおすか人づくり

名古屋市 菱田 満秋

失業を機会に嫁に行くとする

責任も期限もないから人づくり

安全地帯だから壊れただけですみ

失業保険嫁に行ってもまだもらい

大阪市 魚住 満潮



続西成界わい

民生委尻の重たい人がなり

脳底骨折急救車が走り示談屋が走り

共産党の兄がひよっこ顔を出し

霧の手中錠の男ひかれ行く

木津川の渡し妊婦と寒う乗り

愛媛県 村上旭童

山の雪ぐらいに若い血はたぎり

ステレオをかけてオールドミスの夜

神戸市 傍島静馬

歳暮焼止云うたけれども貰うとく

婦唱夫随ワイフの親には温かし

特価売場問屋泣かした品ばかり

笠岡市 木山遠二

小卒の下大学出ボヤボヤし

頭より腕より喉がよく儲け

大阪市 河井庸佑

おだてたらのってくるよと見ぬかれる

大学の講義にほしい処世術

参観日気の毒な程小そうなり

大阪府 谷沢好祐

ニキビ出て来てズボンの寝押し始めたり

古毛布これが我が家のカーペット

建て物の隙間で小さな判屋生き

泉大津市 高津徹也

未練かき消すのに秋風は不要

文学に興味ありげな窓際の人

還暦や某社より随筆の依頼

愛媛県 横光紫光

チンピラが肩で風切りムカッとし

全ストをやってどうにか持ち直し

上役のスキャンダル労働意慾消え

青森市 工藤甲吉

一城のあるじとなって寝台車

拘束二十四時間すまない女房どの

サングラス酒場の姉へねだりに来

お隣りのカレーが匂いたそがれる

松江市 小林孤呂二

ジグザグも生きる道かと哀れなり

痛いところ突けば上司も負けていず

松江市 舟木与根一

ところどころ日本語入れ気障な奴

床の松ひねくっていてめでたけれ

豊中市 林夢虹

昼間から灯をつけ場末での情事

大阪市 今西生薑

新聞沙汰の議員の櫛まだ並び

芸能人機上でやっとのんびりし

京都市 室井八九寸

折からの時雨をガイド詫びてくれ

岡山県 横山一声

栄養食と云うのが年寄り気に入らず

ピアノまで買うたに石けりして遊び

小松市 関戸宗太郎

希望退職そんなにやめられても困り

発表日まだ内の子が駆けて来ず

石川県 高山涼髪

十二月かいなと病人うそぶいた

マスクしてなおさら近寄りがない君

東京の孫抱き村をひとまわり

この椅子までで学歴におさえられ

美弥市 安平次弘道

石噛んで米の値上りまで怒り

スチールのどぎつき映画落目なり

金持ちの子が保母さんと手をつなぎ

王様とおだててデパート浪費させ



宇部市 平 田 実 男

若水をコックでひねる味気なさ

ステレオが恥かしそうに鳴る間借り

つかみ合う子等を嬉しい目で叱り

胃になにもなかった自殺とは悲し

黒ダイヤの街に淋しい風が吹き

香川県 石井 かん な

年の瀬が空気からしてわかり

運転が父母で子供が乗らぬなり

大和郡山市 中 内 孚 彦

見つめられいつも折れちゃう男だよ

貝塚市 杉 本 一 鶴

夫人同伴ゾロゾロと御訪米

島倉千代子婚約成る

「失明しても」その一言にほだされる

大阪市 本 多 清 人

古都あわれ時代にいわくの樹も伐られ

ひき逃げの記事を夫婦で憤り

富田林市 浅 川 八 郎

玩具にはなりたくないわと共稼ぎ

青森県 木 村 凉 人

風が身に沁むよ同窓生が死に

親指を出せば秘書課は心得る

吊橋で女が女らしくない

行商の財布小判が出て来そう

倉吉市 奥 谷 弘 朗

忘年会恐妻順に席を抜け

兵庫県 遠 山 可 住

新聞受に新聞があり夫留守

月おぼろ女の胸がさわぐなり

超勤の予算が残り超勤し

奈良県 麻 生 ア ー ト

割り算の余るが如き日が続き

中年の恋失うてほっとする

がめつさを誇る男が詐欺にあい

笛吹けど踊らぬ中の一人なる

二十年頭を打って父を知り

同
舟
近
詠

大阪市 橋 本 緑 雨

十二月のんきな話してますな

漬物の味をほめてる旅の膳

須坂市 高 峰 柳 児

乗り越しを酔うてる一人慌てない

開宴に無口同士がよみがえり

活花で和服が似合う娘にされる

和歌山市 秋 月 宏 方

退職金嫁ぐ娘三人まだいます

路地の奥へ嫁ぐとテレビ知らなんだ

小商人

低姿勢三百六十五日暮れ

大洲市 米 沢 暁 明

物言えば唇寒し本会議

差押えなど縁がない蟻の町

ベレー帽管理職とは見えません

結婚をしてB.Gの世帯めき

今治市 月 原 宵 明

背のチャック誰に開いて貰うやら

大都市の風景となる靴磨き

妻いまだ素顔を見せず子を産まず

エスカレーター師走の足がひっかかり

各古屋市 長 谷 川 鮮 山

片づけて見れば住まえる三畳の間

下駄を履くそれも久しいお正月

両の手を合わし本心さぐるなり



杉浦重剛先生 と川柳

阿部 佐保蘭

愛国の士杉浦重剛先生が亡くなられて、この二月十三日で四十年になる。仏性誠太郎氏著、立命館出版部発行の「杉浦重剛先生」(発行所、京都市上京区広小路寺町東、昭、十七、九、五、初版一

万部発行、定価一円四十銭)を入手、読む内に先生の愛国の志が川柳の真随と一脈相通するものあるを知り、非常に愉快に感じた。長州藩士井上剣花坊先生の(鎌倉建長寺に句碑が建っている)

咳一つ聴えぬ中を天皇旗

剣花坊

の句も、その一つであるが、杉浦先生のたくまざるユーモアといおうか、その真実に心うたれるものがあった。原文の所々を抜萃させて戴き、頂門の一針とさせて戴く。(ここでは主に詩に関係ある箇所を主とさせて戴きました。)

一二頁に「先生は知己八賢中に家中町時代のことを書いて「予の家の裏に一軒の離家があったのを

幸に、ここに会義社というものを置いて父と共に漢字を教授することにした。確に明治三年の九月であつたと思う。塾生十人ばかり寄つて来た」と言つて居られる。一夜百首の漢詩作会を試みられたもここである。して見ると此倉庫こそ称好塾の発祥ともいふべきである。(先生の家庭——梅窓の一節)

二〇頁——讓次郎、「悪戯」より——讓次郎は四才の時、母の膝に抱かれて、兄様や姉様や近所の子供達がかかるたを取るのを見ておつた。何時の間に覚えたものか、「あそこにある」「ここにある」等と指さして皆を驚かせた。勿論字が読めるわけでもあるまいが、絵と字の形で見覚えたものであろう。八才の時には初めて詩を作つたということである。中略。塾生には何時も「人間は負けぬ気がなくてはだめだ。此の気があれば他人の出来ぬことでも自分が当るの

勇気が出る。自分が日本主義を唱えるのもつまりは日本を世界第一等の国にしようと思ふ負けぬ気じや。」と言つておられる。——佐保蘭曰く。小生が今から廿五年前に創立した川柳職訳研究会(高松宮様に英語を御進講になった故宮森麻太郎先生並びに麻生路郎先生を顧問として創立機関誌S H K 年四回発行を出版せり。)も今にして思えばこの杉浦先生の日本を世界第一等の国にしようと思ふ負けぬ気から出たものともいえる。

四一頁——先生の信念——貢進生として「自分は一番の秀才として選ばれたのである。即ち一番を代表したのである。だから自分の成功不成功は一番の名譽に関するもので、もし不成功ならば、自分は勿論、他のS H K の顧問になつて戴いた先生方に対して申訳ない。励まねばならない。勉めねばならない。即ち自ら反省して尚一層努力しなければならぬ。幸い最初に川柳に理解深い第一回N H K 英語基礎講座担当の宮森先生の知遇を得、その御紹介で第二回N H K 英語基礎講座担当の慶大教授堀英四郎先生に川柳並びに柳文の職訳をやつて戴き、又その御紹介で皇太子殿下と美智子妃殿下に川柳の英訳を御進講遊ばされているオール・エッチ・ブライス学習院教授に小生の尊敬する故前田雀郎先生の自選三十六句を英訳して戴き、これも亦S H K 顧問で御夫妻で私達の仕事に理解深い麻生路郎先生主宰の川柳雜誌四百号記念特集誌に発表させて戴いたことはまことに嬉しく天祐ともいふべき有難き極みである。これ等の諸先生の御厚意に対しても粉骨碎身川柳職訳の完璧を期さねばならぬと心に誓う次第である。

先生の苦学——(四二頁)着物は唯一枚。夏は単衣にし、冬は綿入にして着られた。洋服は学校から支給されることになつて、金が無いので、破れても修繕することが出来ず、破れたままにして置かれたからチョッキの横が摩切れてしまい、上衣を着たまま、チョッキを引抜くことが出来た。杉浦のチョッキといつて、當時学生間に有名であつた。——佐保蘭曰く——これ一つを見ても、先生は只の学生と違ひ文字通り赤ちゃんのような、所謂故前田雀郎先生の素の境地のようなもので、所謂伊上凡骨先生のように川柳こそ作句されなかつたが(作ればいくらでも作れたと思うが、そのチ

ヤンスなく都々逸はお好きで機会があると自己流で節もかまわず興の湧くままに声高に唄われたそうである。所謂川柳を地で行った高潔の士であられた。

野蜜問答——英語留学中野蜜問答というのがある。「君の国は野蜜である。」「何故か。」「刺身を食うから野蜜である。」「刺身を食うて野蜜なら、君等の国も野蜜である。何故かなれば血の流れるような生の肉を食うてはいいか。生の野菜を食うてはいいか。」「いや日本はやはり野蜜だ。婦人を軽蔑するから。」「そうか。それなら君の国は尚野蜜である。男を軽蔑するから。」「佐保蘭曰く——実に面白いではないか。先生の日本人としての面目が躍如としている。近頃こんな愉快な問答に出喰わしたことがない。今の東大の第一回留学生であられた先生の在英四年の留学中の問答だが、それから八十七年たった今でも一寸とも時代のずれを感じないどころか、逆に教えられる処があり、これ又川柳の醍醐味を無意識の中に地で行ったものと感嘆おく能わず、日本人として痛快味さえ覚えた。

千頭久壽猪子氏との結婚——先生の二十七才の時、友人千頭清臣氏の妹久壽猪子氏と結婚せられた。(中略)貰って来たよというようなわけで福富が帰って来た。

其の当時はどういう考えであったかわからんが、妻を迎えるには、自分の家ときまっても無いといかんという考えで家を一軒買った。その他には何もありません。或る友人が金に困るから買ってくれというので、女の縮緬の着物を三田で買ったのがあったので、祝言の当日はそれを着て居った。妻も無論着のみのままで来る約束じゃったが、当日になると玄關へ呉服屋が来て、お嫁さんの道具を持ってまいりましたと大きな声で呼ばれてびびくりした。箆筒もある。鏡台もあるのが驚いたよ。ごく内々で式を挙げたので、向うから千頭と母親がついて来たばかりじゃった。いよいよ盃を交わすと

なる。僕の所には、下男一人しか居らんので急に酌をする人を借りに行くというような始末じゃった。翌朝になって見ると妻が顔を洗うものが無い。待たしておいて下男が盥を買に行った。こんな有様で、自分は一体どういう仕事をしとるかということ、妻に了解させるため随分苦心した。以て当時の先生の生活状態が分る。——佐保蘭曰く「花酔先生の「ふるしきを着ても歩けずひとり者」の句を思い出させるようなほほえましい生活、その清貧に屈せぬ先生の毅然たる態度がおおふつとして眼前に泛んでくる。小生も川柳

職訳の仕事に妻に了解させるため

随分苦心した」先生と小村寿太郎氏——先生と小村侯は大学南校時代——佐保蘭註(今の東大で先生はそこを出て明治十三年今の一高の前身の東京大学予備門長に任命せられた)からの友人である。小村侯は第一回に留学し、先生は第二回に留学せられた。先生は教育界に身を投じ、

侯は外交界に活躍した。しかも先生は自身のことを「わしのすることとは一つとして国家の為でないこととは無い。国家を離れて杉浦重剛は存在せんじや。」といい、又小村侯を評して「外務に小村あり将来必ず国家の良柱になるであらう。唯国家あるを知って一点の私なきもの、当今の第一人者であらう。」と言われた。先生も貧乏であったが小村侯も亦貧乏であった。當時侯は借金取に苦しめられてどうすることも出来なかったの

で旧友七人が連帯保証で四千四百

うな。また一つには小村が貧乏して居った時に補助したことがあ

る。今こちらから無心をいうと報をもとめるようになるからじゃと

いて許されなかつた。日露戦争の時小村侯は講和談判の為に米国に往った。何人でも小村侯以上の事は出来なかつたのであるが、国民の予期が余り大きかつた為に、小村侯のボーツマスに於ける談判は、国民の大非難を招いた。其の時先生は唯一人「小村じやからあれだけのことをやったんじや。他に誰が行つたかであれ以上のことは出来やせん。永年つきあつてよく小村の為人を呑み込んでいるから日本中挙つて攻撃しても自分一人賛成じや。」と話された。——佐保蘭曰く「先生もえらかつたが小村侯もえらかつた。かかる大先生をもつていたので、日露戦争のあとの危機も救われたのである。全く有難いことである。これも皆明治天皇の御後威の然らしむる所と頭の下る次第である。友を信ずることかくの如くありたいものである。小生が川柳の職訳を始めた動機は世界大戦の起る前列国の経済封鎖をうけ、その理由として日本

人は野蜜で戦争好きの国民として排斥された。その蒙を開く為小生は我々酒屋でも米屋でも日本全体が詩作する国民であることを知らしむる為、我々の川柳を宮森先生に英訳して戴き、これを国際文化振興会から高松宮様の費用で丸善から出版、世界各国の図書館に寄贈して戴くべく努力したのである

が、宮森先生が途中で他のお仕事に追われ川柳の英訳が(一つは先生は自分の佳句と思われる句以外は英訳されぬ方針だったので、小生の方の材料が追いつけなかつた故もあるが、路郎先生が川雑十二月号で言っておられる通り、俳句短歌に比し川柳関係の句集その他小さいのも大きな原因であつた)一頓挫をきたしたのは返えすがえすも残念であつた。幸い先生の御紹介で堀先生、堀先生が病いをえられたあとは、又堀先生の御紹介でブライス先生といつても日本

近畿日本鉄道

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ近鉄特急

ステキな特急 2階電車

大阪—名古屋 ノンストップ 2時間18分

大阪上本町から	名古屋ゆき	20	往復
	伊勢ゆき	9	往復
名古屋から	大阪ゆき	20	往復
	伊勢ゆき	10	往復
伊勢から	大阪ゆき	9	往復
	名古屋ゆき	10	往復

オーレ座席指定・特急券は乗車の14日前から近畿日本ツーリスト・日本交通公社全国営業所で発売。G11鉄上本町・宇治山田と特急停車駅は5日前から発売。

近畿日本鉄道



病氣と川柳

(3)

北川 春 巢

五、高血圧

高血圧のことは句では単に「血圧」としてあることが多いようでありませう。

血圧にわずかの株がひびく
なり 涼 髪

高血圧の原因は医者の方でもまだよくは分っていないのでありますが、精神的ストレスが関係することとは確かかなようであります。川柳作家はよくこのことを見て取っておりまして、僅かしか持っていない株の上り下りに一喜一憂するの自分の血圧にひびく、と断定しているのであります。

取引のように血圧たずね合
い 美太楼

「取引きのように」といい切って血圧を商売の取引きのようにいった処がこの句の面白い処であります。

血圧を無視してただの酒を
飲み 法泉子

人間の心のさもしさがよく現われている句であります。招待された

「ただ酒」ならば、血圧の上るのを無視してガブガブと飲んだ、というのであります。先程からどうも「酒を飲む」句ばかりが出て来まして、川柳作家は酒ばかり飲んで

はなにかと思ひますが、世の中は何といひましても、金と酒と恋愛とで廻っておるのであります、人間の欲望はこの三者に絞られると思ひます。病気の句の場合にはそれが特に「酒」に絞られるわけ

で、病氣以外の句では「金」や「恋愛」の句も多いのであります。

血圧の高さ着になる酒宴
美由起

これも「酒」の句であります、
「着になる」という言葉がこの句の生命であります。

三味線が来ると血圧もう忘

れ 淀 月

この句も「酒宴」の句であります。酔いが廻って、三味線を持った芸者がやって来る頃にはもう血圧のことも忘れてしまった。という人間の弱点を詠んでるのであります。

六、がん

がんは前にも申しました通り、現在のところでは治らぬ病氣であります、ただこれを早期に発見してその部分を手術で取除いてしまえば治るのであります。ひと口にがんといひましてもこれは体じゅうどこへでも出るものであります、日本が一番多いのは胃がんです。胃がんといへば胃がんのことのように思っている人もある位です。胃がんは日本人のがんの二—三割を占めておるのであります。次に多いのが白血病と

いう血液のがんであります、原爆以来有名になってきました。次が肺がん・子宮がん・肝臓がんという順序になっております。近頃では手術の技術が進歩しまして、がんが相当進行しておりましてもこれを取り除くことができるようになり、「早期に手術すれば治る」という「早期」がかなりずれてきたわけでありませう。以前は、がんという診断を下されたならばもう死刑の宣告を受けたも同じだ、というので本人もガツタリして却って死期を早めることになり兼ねませぬので、医者の方もがんであるという診断は本人には知らさないのが医者の道義である。というふうにいわれておりました。しかし手術可能な場合にはむしろ本人に知らしてやって、手術の決心を早くつけさせる方が本人のためであると最近はいわれるようになってきました。千葉大学の中山教授という方は、胃がんなどの手術が上手だと関東方面ではいわれておりますが、関西にももちろん中山さんに負けぬ位い上手な方が沢山おられます。中山さんは色々のところへ随筆などをよく書かれますので有名になったわけでありませう、この中山さんが診察されて、これは胃がんかといわれた場合に、手術がしてもらえとい

一の大先生が川柳の英訳をして下さるので、佐保蘭は日本一の果報者と地下の柳翁の見えない御加護の賜物と感謝している次第である。

尚小生が川柳懸訳研究会を起しその機関誌S H Kを発刊、その創刊号に祝創刊の広告を全国柳友諸先生方にお願ひした時全国の柳友諸先生が過分の広告を後援の爲出して戴いたことは今以て忘れ難き感謝の思い出であるが、その時一部の柳友がその往復ハガキに川柳の英訳を馬鹿にしたようなことを書いて小生をからかったのも今は思い出となった。負けん気の小生は今昭和十二年九月二十日付発刊のS H K第一号(頒価金二十銭菊版三十六頁)を手にして今に見ている僕だって見上げる程の大木になって見せすにおくものかと、発ぶん努力を心に誓つたものであるそれから満二十五年月日は夢の如く、戦争が苛烈となり、日、独、伊同盟となり、川柳の独逸語訳、伊太利語訳、と苦心を重ね、敗戦から民主主義となり最近漸く川柳の英訳も日の目を見るようになり、自分の努力の万分の一が報いられたつあるような気がするのがあるが、自分一人の力ではどうすることも出来ない。全国柳友の御

って却って患者は喜ぶときえいわれておるのであります。それは手術で治る見込みのある時に限って、胃がんだといわれるのでありまして、見込みのない場合にはやはり胃がんだ、とはいわれないからであります。「自分は胃がんだはない、と言った患者を某先生が診て、この胃がんを見損うとは中山教授もどうかしている、といったという話を聞いたが、その先生の方がよほどどうかしています。」と中山教授がどこかに書いておられたのを読んだことがあります。

がんいうかも知れぬので診せしがり 遠二

これは病人の恐怖を適確にいい現わした句だと思えます。

がんでないとわかり長生きするときめ 遠二

この句は前の句と同じ作者の句であります。思い切った診でもらったところが、がんでないとわかった。これは今いいました医者の口先きだけの診断でなしに、本当にがんでなかったものでありましよう。こんな場合には医者も嬉しいものであります。病人にしたならもう今迄の胃の苦痛は治ってしまったように感じるものでありまして、自分は死にっこない。これで長生きできるのだ、と思うのであ

ります。胃がんでなくてもほかに死ぬ病気が沢山ありますが、「長生きするときめ」と断定しているところが面白いと思えます。

がんだとも知らずに麦を播きたがり 旭童

農村の方の句であります。この老人の病気ががんである。ということは家族だけには言っているものとみえます。本人はそれを知らないのですから、「早く麦を播かねば」と言っているのです。「その麦が熟れる来年の初夏の頃にはもう死んでしまっているかも知れぬのに……あわれなものだ」というのがこの句の意味であります。

病室でがんの話はみんなさげ 没食子

これもがんで入院しているのではありませんが、家族の者はがんだと聞かされていて、病人の余命いくばくもないことはよく知っているのではありません。そんな場合、病室内ではがんとという言葉に口にするとはタブーでありまして、みんな意識してがんとすることは言わないのであります。本人ももううすいはがんであるまいか、と気付いている場合が多いのですが、やはり恐いものですから、がんとという言葉を出して言わぬことが多いのであります。この句には、そ

のへんの心理がうまく詠まれていると思えます。

がんだけはなりとうないとかんで死に 草右

「がんだけはなりたくない」といっていた人ががんにかかって死んだ、というのであります。がんと病気が非常に多い病気ですから、そのがんで死ぬ場合も多くあると思えます。

阿蘇雲仙 連れられがんと知らぬ妻 清生

これは、夫は妻ががんにかかっていることを医者から聞かされて知っているのですが、妻の方は自分



の病気ががんとは知らないのではありません。女でありますから、あるいは子宮がんかも知れませんが、転

地がよいというので阿蘇や雲仙等の名所を連れ廻っていると解釈してもよいと思えます。「麦を播く」と同じく、病人をあわれと思った句であります。「麦を播く」のは作者とどんな関係にある人か、句では語られておりませんが、この句は「妻」と「夫」であるところに、二人の悲しみが、いや「夫」の悲しみが一層よく現われておるといえます。

がんで死ねばあきらめの早いこと みのる

がんで死んだ場合には、「ああがんだったのかそれでは仕方がない」とあきらめが早いというのであります。

口ほどにがんのこわさは割り切れず 春雄

今迄がんのこわさについて色々と言ってきたが、自分自身については考えないのが実際でありまして、誰でも「がんにかかるのは他人であって自分ではない。」と思っているようであります。この句の作者は医者であります。私も個人的によく知っている人であります。この句は医者でなくとも共鳴する処がある句だと思えます。平素よく他人のがんを見ております。平素よく他人のがんを見てお

共鳴をおぼえるものがあるのであります。

(つづく)

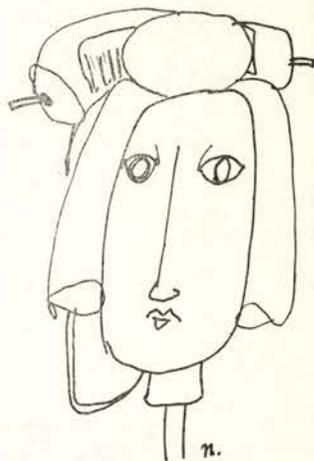
本誌十二月号の飛燕往来にホルルの並木東田樓氏の川柳英訳の隠れた理解ある先達であられる腹乃女史宛のおたよりを拝見して涙のこぼれる程うれしかった。自分の力の許す限り東田樓氏の御期待に添い川柳の名英訳を川柳誌上に発表させて戴くべく努力することを深く深く心に銘した次第である。

最後によく都々逸が好きで、興に乗ると唄われたという先生の御霊前に、今流行の王将の替唄作詩を佐保蘭プレゼントしてこの稿を一先ず終ることとする。

川柳職訳研究誌SHKを唄える替唄王将

- 一、吹けば飛ぶようなSHKにかけた命を笑わば笑えうまれ京都のあの加茂の水月も知ってるおいらの意気地
- 二、あの手この手の職訳稼業やぶれ長屋で今年も暮れた愚痴も言わずに女房の千代が怒る笑顔もいじらしい
- 三、あすは日本を出て行くからは何があんでも成功するぞ空にかかげた川柳の名句俺の闘志がまた燃える

大阪と 川柳



戸田古方

川柳雑誌四二六号(十一月号)の「川柳書架」に私の旧著「川柳二千六百年史」が紹介されています。孤蓬は私の戦前の旧号。十八行、三百字余りの短い記述の中に路郎先生の序とともに、題字をいただいた恩師本庄栄治郎先生の御名前を見るのもなつかしく、跋文を書いてくれた旧友宮本又次君の名前がうれしくも出ているのです。宮本君は跋文の中で、ほとんど一行おきぐらいに戸田君、戸田君と私の名前を呼んでくれていますが、全く親しさの満ちあふれた名文でした。

宮本君と私は本庄先生の同門、同期で、ともに経済史に関心をもち、ともに大阪の生れでした。その時のゼミナールの課題が「徳川時代の交通史」であり、私に与えられたのが「三十石船の研究」ということでした。この報告の概略は戦前、菊倍判時代の川柳雑誌(二〇一号)に「三十石そのほか」としてのっています。私が商

売人に引戻されていた間、ずっと宮本君は学徒としてとどまり、彦根高商講師を振出しに九大教授を経て、学位もとり、只今大阪大学の経済学部教授であります。

宮本君は大阪外国語学校のフランス語科から京大に來たものですが、数の少ないフランス語経済史研究家として不朽の功績を残す機会に恵まれましたが、戦後九州から大阪に帰って来てからはもっぱら大阪研究の史家として重きをなし、数々の先人の及び得なかつた出版を重ね、先年「なにわ文化賞」をも受賞しました。彼、宮本君は大阪堀江に生れ、堀江に育つた生えぬきの大阪人なのです。

宮本君はその「はしがき」の中で言っています。

「大阪および大阪人を江戸との対比においてはつきりさせようとした随想、小論、雑記をとりまとめ……」とあって、いささか重視したところもありますが、気の利いた「大阪町人」研究の落穂集であります。

私はこの「大阪の今昔」を糸糸に、川柳を緯糸として、大阪の町と人の歴史と共に大阪と川柳について述べてみたいと思います。

開巻第二頁目

御奉行の名さえも知らず年暮れぬ

と小西米山の俳句が出てきますが、大阪に川柳するわれわれにとつて、この句は大阪とはどんな町かを教え、今日の大阪を作り出したきたエネルギーのズバリ分析をして見せてくれているようにも思えます。

近代大阪の初めは親鸞聖人八世の孫連如上人による大阪御坊建立

のことからでした。浪花、浪速、浪華の名は古事記、日本書記に所謂、神武東征に因んだようですが、「ナニワ」の「ナ」は「ナメル」の「ナ」で食物、「ニワ」は庭で、食物の沢山ある庭、即ち魚の沢山いる海だという解釈もあります。奈良に、京都に都が盛んであった頃は大陸へ渡る船着場であったり、紀州熊野へ詣でる道筋にあたっていた位で、あまり伸びてはいませんが、今残っているのは堺の東郊の大仙院だけです。

には、京都の禁裏を意味し、江戸長唄の「御代」は江戸幕府であったと宮本君は言っています。しかし、大阪人はあらわに抵抗を示さず、不即不離の態度を支配者に示していたのでした。「損して得とれ」とか「負けるが勝ち」とかいうのと一脈相通するものがあります。しかし、「天下の台所」とか「大阪の豪商一度怒って天下の諸侯懼るるの威あり」という大阪はどこからきたのでしょうか。

石山御坊はやがて石山本願寺となり、さらに大阪城となるのですが、近代大阪の母胎はこの寺の境内に発達した寺内町です。緑日の干し店のようなものから大きくなっていったのに違ひありません。

武士は与えられた米を何でも金で買える世の中になっていました。武士は与えられた米をできるだけ有利に金に換えたいのですが、地方の狭い市場では買い叩かれるので、公正な値段で取引のできる場所をと、水陸交通の最も便利な大阪をみつつけ出しました。かくして大阪は日本における諸色の中心市場となり、中之島を挟む堂島川、土佐堀川の岸には諸国大名の蔵屋敷が建ちならび、産米や物産の貨幣化が円滑に行われたのでした。年とともに貨幣の必要は殖え、大阪商人、即ち掛屋への前借はかさんできて、大阪商人の助力なしでは諸大名の台所はニツチもサツチも動かなくなつてし

るため徳川連枝の松平忠明が大阪城主として努力をつづけるのです。大阪の地租を全免しました。その頃今の造幣局あたりに立派な東照宮を作りましたが、このお宮はあまりはやりませんでした。地租の全免だけを喜ぶどころにも大阪人らしさが見えます。そしてさきの米山の句のなかに偽りのない大阪人の心が読めます。又、大阪人が地唄の中で、御代というとき

まうのです。それが大名貸の実情でありました。

しかし、「御奉行の名」も知らないです。大阪人の政治への無関心は「天下の町人」にはなれても、西欧ブルジョアのように天下を握る町人、「町人の天下」を作り得ませんでした。それが明治維新後における大阪の立ちおくれともなり、又今日の大阪経済の地盤沈下の説明もしてくれません。しかし、大阪のエネルギーはじっくり粘りっこいものを頼もしくも持っているのです。かつて明治の立ちおくれを克服した如く、やがて地盤沈下をも是正すると信じます。

江戸ッ子の生れそこない金をため

これは駄ジャレに近い拙い句であります。「宵越の金を使わな」というセリフの川柳化はできています。しかし、大阪はこれとは違います。大阪は「金の切目が緑の切目」とか「町人の氏素姓は金銭」というふうに金を謳歌するともに、金でかち得る自由をたたえたものでした。江戸時代に大阪はしばしば「御用金」をおおせつかけていますが、割合素直に之に応じています。しかし大阪人は「献金」ということは好みませんでした。幕府に差し出してしまふ金にはちがいありませんが、「御用金」は一応借上の形をとっているところが大阪人を得心させたのでしよう。大阪人の経済観は財を

蓄えることではありましたが、深追いせず、来るところまで吐を決めればキレイに詰めもしました。「きたなく儲けてきれいに遣う」とは大阪人のモットーでした。儲けるといっても、その儲け方は大へん合理的でした。合理的だから永続きもしました。きたないといっても底を支えるものに信用が非常に重んじられました。「利は元にある」と骨折って安く仕入れ、経費を切りつめ、顧客第一と、薄利多売を心懸けたといえます。大阪人の仕事、節約、儉約はこんなところから出ています。それに輪をかけたのが浄土真宗の感恩の思想で、すぐ勿体ないと大阪人は口にします。利をむさぼるより自然の恵みとして、これを受取るうとしました。滝沢馬琴はこの大阪人を評して「儉なることを京に学び、活なることを江戸にならう」といっていますが、散ずる時には思い切った散じ方、紀文大尽のような散じ方をしたものでありました。

しかも、大阪の「活」の中には「艶」なるものも含まれているのです。宮本君は大阪弁の「こう」ということばで、このことをたくみに説明しています。「玉露にふくまれた甘い甘味」だということです。ドウトンポリ、ドウジマ、ドブイケ、ドショウマチの濁音にみる一見野暮ったさは、その底を流れる土性骨を没し去りはし

ていません。この大阪の土に生れたのが西鶴の文学であり、巢林子近松の戯曲でした。宇治平等院の鳳凰堂は日本文化史前期における国風文化の傑作でしたが、大阪文化は後期文化の大集成であったといえます。それが西鶴や近松の出た元祿時代でした。川柳はこの元祿の流の末にあらわれたのでした。柄井川柳は前句附から独立した万句合せを始め、吳陵軒可有は柳樽を初篇から篇を重ねてゆきました。そして川柳は江戸中心に発達して行ったものでした。当時の川柳人口がどのくらいで、その分布がどんな合でであったかわかりませんが、江戸が中心であったと思われまふ。大阪の人がどのくらい川柳を作ったかはっきりしません。江戸、大阪の交流のはげしさから考えて意外に多かったかもしれせん。こんな数字がはっきりするとずい分面白いと思ひますが、不学、不勉、今、談り得ないのは申訳ありませんが、川柳の源流、俳諧ははっきり上方のものであります。江戸末期の文化爛熟期には川柳も鼻持ちならぬ戯作におち入り、明治中期にいたって、川柳復活となるのです。その頃から大阪人もふくめて上方にも川柳作句の精進がはじまります。江戸川柳の末流である東京作家とくつわをならべ、手をたずさえて川柳建立のために切磋

してきたものでした。しかし、諷刺、滑稽を中心とする谷脇素文の漫画にのりそうな川柳と、穿ち以上のものを目標とする人間陶治の詩としての川柳が見られるようになりしました。人間陶治の詩とは路郎先生に入門頭初、おききたこととはですが、先生は更に社会批判、人生批判とそれに補いをつけていられます。なる程、川柳は笑いの詩でありましようが、その笑いには段階がありまして、私はつねづね次の六項にわけて理解しています。一、生理的な笑い。脇の下でもくすぐるような作り笑い。作らせ笑い。おかし味の句。二、「よくいえば悪くいわる後家の髪」は下下の下に属するもの「雞があくびをしたとつんほい」にはベーンズがあつて上の部に入りましよう。三、論理的な笑い。川柳の中心ともいふべき穿ちの句。「女湯へおきたおきたと抱いてく市井のスケッチの中にある知性、頭でする笑ひ。現代人の名句も数多くあります。三、論理的な笑い。諷刺、皮肉は時として社会悪に闘いをいどみます。論理的というわけです。古句には稀な世界。頭だけの笑より、ちつとは肚にもびく処のある笑ひ。

四、情味ある笑い。肚から胸に笑がうつります。真実味の句がここに入ります。南無女房乳をのませに化けてこさきの女湯の句よりはるかに深刻で、泣をさそいます。五、悟の笑い。笑ひも末梢から全身にまわったところ、軽身の句の世界ですか。淋しいも秋、おどろくも秋。こんな句も古句にありました。六、川柳の絶対境。最高川柳。宗教に通ずる川柳。人間陶治の極致。凡聖一如元旦のころしる路郎君見たまえ渡菟草が伸びている路郎人間陶治へ進むこれが私なりに画いてみた青写真と心得ています。あえて申します。人間陶治の詩として川柳を眺めようとするなら西鶴、巢林子にまで立ちもどらねばなりません。その土台の上に打樹てられたもの。それがわれらの目ざす川柳かと思うのであります。十二月号川柳塔の中でほんとうに罰やと思う人が死に売り掛をヤイヤイ言えは他所で買ひ句主は大阪生れの大坂育ちの山川阿茶女史。たくまずして、色に出ている大阪調はこの一文の結びにつかわしていただくに丁度かと思ひまして追記といたします。

て、引きさがつた。それはまことに簡素なものであった。外装を脱いでる人もあったが、外装は脱がないで下さいという心づかいもあって、ホントにいい告別式でした。普通だと僧侶の読経や神官のノリトがある間、立って待っているのだから、神官も僧侶も居られず、キヨシ夫人の部屋には遺影を飾った以外、部屋全部がカーネーション、菊、忘れな草、百合など白一色の花で覆うわれ壁も見えない。清浄そのものだったとのこと。そしてその部屋の奥まったところに愛二さんが、ただ一人立っていられたという。

帰って来た腹乃が私に「お父さん、私が亡くなったら、あんな告別式して下さい。私は遺言しておくわ」と言ったところを見ると、よほど感にうたれたらしい。愛妻の告別式はワシの思うままにしたい。イヤ、ワシ一人でもいいのだという愛二君の気持が判るような気がする。私もそれでいいのだと思った。

安らかに眠って下さい、奥さん。そして今後の愛二君の健康をみまもって下さい。左様ならキヨシ奥さん。

蓬萊の火事

十二月二十日のことである。私はフト、眼が覚めると、何んか寝たままに、寝台のラジオに寝たままにスイッチを入れたところ、「難波新地四番町」という声がし

たので、蓬萊が火事だナと直感した。続いて「中華料理店蓬萊から出火、ただ今盛んに燃えている」と報じられた。時計を見たら、六時十五分だった。蓬萊は（羅邦強社長）社として多年ご支援をたまわっているお店である。私は寝台の上で起き直り、すぐ寝台にそなえつけている非常ベルのボタンを押した。

腹乃が直ぐ二階から降りて来た。「蓬萊が火事だ。すぐ出かけるよ」と言ったら、

「あんたが行ったって、マにあうものでもないし、人にもみくちやにされるだけですよ」と、老婆はすこぶる冷静である。こんな時私はもう齢などは考えないで、若かりしころのジャーナリストになりきっているらしい。私は老婆の一言に、ハッと我れにもどって、思わず苦笑した。

「ダメだなア」と言っただけで、私にはベッドの上で坐り込んで、少しも早く鎮火するよう祈るより外に手がなかった。朝の食事をすまし、忙ぎの柳務をやっているところへ、林君が出勤したので、お見舞の品を提げてもらった。

火事の現場は戎橋筋の繁華街だけに、大変な弥次馬が出て、南警察署は広い範囲に交通制限をしていた。火元は別館と東隣りの平和

園とのとりあいの辺らしく、別館には火を扱う仕事はしていないし、平和園の方では新年にそなえて、遅くまで夜業をしていたので、その方の火仕舞に手落ちがあったのではないかと新聞にも書かれていた。とにかく、平和園、蓬萊別館、蓬萊の本館、その他の五軒ほどが全焼した。私が出かけた時にはまだ北側の方では盛んに煙があがり、チラチラ火が見えていた。蓬萊では南店が仮事務所になって、見舞の受付をされていた。企画部長の池田正三画伯に会って一応お見舞の言葉述べた。お手伝いのしようもないので、しばらく池田画伯と立話をして引きあげた。

それにしても、池田正三画伯は近く個展を開くため、とりそろえていた二十点余りの作品や、フラスコから持ち帰られた参考品のスライドやカメラその他の洋画材料を全部企画部の階上で焼失されたことはお気の毒で、慰めるに言葉もない次第だ。額縁やカンバスなら又買えるも、自分自身でも再現作品ばかりは、喪われた芸術は不可能であろうと思うと同情の涙を禁ずることが出来ない。尤もこの不祥事によってより以上の作品が生れることもあり得ると思われているので、そうあることを切に祈っている。

▼新春二日から本館書店（仮改装）で名物販
優待券の販売を開始された。

だ。それから一層面白かったのは、川向うの荷揚場で紙薦を揚げている一群と、此方河岸の我々との間に行われた紙薦合戦だ。

我々の紙薦にはこの合戦に備えて何れのものにも、ガン切と称する刃物を仕込んだ木片が幾つか取付られてあり、双方の糸と糸とが相摩する接戦の場合、上手にやると相手の糸が此方のガン切にかかる、そうなったら最後、糸はブツと切れてしまい、敵の紙薦はヒョウヒヨツとして、天の一角に消えてしまふ。その痛快さつたらない。自慢ではないが、私は武運？

に強い方でこんな工合に敵の紙薦を幾つ仕留めたか知れない。こんな調子だったから、朝出たきり昼飯も喰わずに、紙薦揚げに夢中になって母親から叱られたこと一度や二度でない。それも今は遠い昔の思出になっている。

童心の昔の夢は紙薦を揚げ

★

ひとり言

児島与呂志

時事吟を作句することのむつかしさを感じていた私が、十二月号

本誌の川柳と世相について//の路郎先生の文を本当に意義深いものと読み感じておりました。再

度本社新年句会席上の柳話に堂々たる年齢を無視した心からの叫びにも似た講演を聞いて、いたずらに時代の流れの人情、風俗、習慣、社会制度、の相違による世相を、一人よがりの句を作句することをつくづく恥しく感じた私でした。

けれど私は私なりに//いのちある句//と信じて作句しているつもりであることは、事実であるならば、その句が選にもれた場合はあくまでも自分の努力の未熟を反省せねばならないのであろう。その進歩の為には自分の努力が必要だ、進歩とは反省することだ、選者に対しての失礼な言動を免ずることより、先ず、自分の作句に反省するの必要を感じなくてはならないのではないだろうか。川柳への精進の為に反省を感ずる私である。

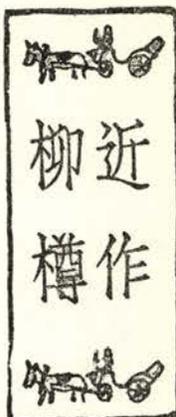
不朽洞カップの

重量感

石倉旅風

本誌第三九二号（新春号）「わが輩はねずみである」へ「不朽洞賞カップ重たく持って覚め」を書いて以来、長い夢がこの卯の年頭に実現したようこびは筆舌に尽くせぬものがある。

欠席者の句に対しても、わが川雑選者の正当公正を知った歓びも大きい。



麻生路郎選
北川春巢選

抱き上げる吾が子の重さ胸を病み 羽尾野市 古川 静波
 療養所明けても明けても海の幸 同
 世話好きのわりに看護婦売れの 同
 御近所の義理をメモして旅に出る 同
 お茶漬の後が淋しい妻の留守 同
 牛のよにきれいな虹もよう見ずに 鳥取県 鈴木村諷子
 溜飲を下げたはいやな奴が死に 同
 抽出しも片づけてから春にする 同
 何不足なくなつたとき亭主病み 同
 口止めの酒へトボトボついてゆき 同
 勉強の虫入院をしていても 石川県 前田百万石

場なれせにやあかき落ちる気で受ける

心配な程長男がもてすぎる

セックスを娘に言う役をさすり合い

シャンの妹いる後輩へついでやり

平凡な夫婦で人にうらやまれ 竹原市

釘たんと使いゆがんだ箱が出来

伴はどの子もこの子ももんでくれ

ベチヤク チャク／＼だあれも核心にはふれず

一杯の酎で恐いものがなし 岡山県

ふん切りがつかず灰色主義でいる

とつときの笑顔を見せて見舞わ

香林夫妻におくる

帰る日もなからん旅に手を取られ

生き抜いた記憶の中に除夜の鐘 兵庫県

下町に住んでたこ焼口に合い

しんじつを誰もわかつてくれず冬

輸送力増加へ雇う押込み夫 枚方市

低給者泣かず超勤拒否を決め

同

同

同

同

山内 静水

同

同

同

永宗 宗義

同

同

同

常岡 孝風

同

同

宮川 珠笑

同



旅行苦吟 (二)

戸田古方

薩摩半島の南端に長崎鼻があります。海に向えば右手にすり鉢型の開聞岳がそびえ、まことに魅力的です。海の碧、岩の黒、自生している蘇鉄の緑、アクセントとなる真白の灯台。

ピントグラスの奥の灯台まっ白い

灯台の方へもピント合せと

「灯台の方へも」の「へも」か「ピントグラスの奥」の「奥」か。どちらが、長崎鼻をあらわしてくれるか、今も迷っております。

そこへがらりと趣向をかえて

最南端と聞き小便がしとき

たく 村諷子

女生徒づれではかような足跡をのこすわけにはゆきませんが、動く私の句に対して、最南端長崎鼻が感じられます。

何しろ十七音字で何もかもは無理なこと。旅行吟には地名を前書にするくらいは許されねばなりません

すまいが、問題は前書とあわせ見て、その土地が感じられ、且つ川

柳であるかどうかということ



始がビエロになって家平和 同 ストープが真赤でも寒い妻の留守 青森県 岩淵 一星

葱はもう売切れました雪催い 津市 嶋野ひ呂し 奥さんは美人だけれど花は枯れ 同 同

歳時記に刃向うような花作り 同 豊作は神経痛を温泉に集め 同 同

下受けのその下受けの手内職 同 港の見える丘もだんだん削られて 伊丹市 小川静観堂

まっすぐに生きて男の葱を下げ 京都市 大久保 和三郎 どの家も子供が書いた家のよう 同 同

太陽に千円札を見てもらい 同 齢だろか追ひ風向い風に足とられ 同 同

敬称で呼ばれた金の要る話 同 再会は病院でした胃かいよう 石川県 南 伝一

笑い声洩れて団交も山が見え 新居浜市 小林 孝正 民主主義などと採決ばかりとり 同 同

老いらくの恋はあんまもしても も 同 古傷の深さを知ってからの友 同 同

成り上りに見られたくない書籍棚 同 頭より腕に自信の菜葉服 玉野市 小谷 仙山

酒のまぬ客も来て欲し松の内 大阪市 吉田 季生 気狂いにも鬼にもなって芸の道 同 同

開拓田ジープンはいた案山子いる 同 正月は田舎ですると若夫婦 同 同

紅葉狩もったいなくも雨になり 同 陰の声そしらぬ顔で塩を撒き 兵庫県 河原みのる

正直に神宿らねど悔も無し 奈良県 草深 酔舛 二千円吹けば飛ぶよな百合の種 同 同

振り出しへ戻り停年まだやる気 同 羊かんの十二単衣を脱がせたり 同 同

玉砂利を踏み尼寺に威を正し 同 大和中宮寺にて 木枯へマスクを買って身構える 岡山県 藤原 秋月

潰瘍のない牛の胃をけなるがり 同 潰瘍のない牛の胃をけなるがり 同 同

す。 デラックスな指宿観光ホテルの名物はジャングル風呂です。

ジャングルの茂みに裸婦の 恥らいで 村風子

三時間程生徒用に空けてもらったのでしたが、ジャングル風呂は昔の要塞地帯のよう、匂も駄目。ただ、アーケードのような売店やら、遊戯場やら、理髪室、美容室がうれしうて

パーマネットかけてるのかと覗かれる

ビューティールームパーマの真似もしたくなり

世間では何のことやおっしやるけれど、学校では老嬢たちが気狂いじみた取締りをしていますので、ついこんな句ができました。どうも世間に通用する句じゃありません。

「鹿兒島より宮崎」という中に

ピロウ樹の向う側から朝日が出 村風子

もう一句。「鹿兒島」の中に

街路樹のさすが南という感じ 村風子

南国の風物は一番植物によく出ています。私は右廻りに宮崎、青島で最初にピロウ樹やフェニックスに出会いました。

根性の太さでしげるフェニックス

一かかえも、二かかえもある幹のたくましさ。三十年前に見かけなかったこの亜熱帯の植物は正に観光用に栽培せられ、レイアウト



ほえる事忘れた犬も いる 平和 同

初孫へ聲は冷たくあつかわれ 竹原市 杉原 愛鳩

花聲の他は四角や○に見え 同

貧乏の味良薬と同じ味 愛媛県 村上 石峰

こぶしひろげて労資お目出とう 同

支払のついでの方を多く飲み 大阪市 田中 青都

本能に迫るウインクするネオン 同

晴着着て猫背見直す三面鏡 岡山県 鳥取 周甫

取れるだけ取って他人の面になり 同

生字引勝手な時に引出され 玉島市 井上 旭峯

違う趣味隣は鳴かぬ虫を飼い 同

出世した方の伴はよりつかず 京都市 小黑 王石

古武士にも似た風格をベレー帽 同

チョコレートが戻って来 子ウツシ 広島県 山田スミ子

引越しへ菊の根っ子も準備され 同

貯金帳そろそろ嫁がほしい額 鈴鹿市 吉田 俊和

ドラマならここで助かる苦にも なま 同

ミサペールかけて百姓いかすなり 芦屋市 里田一十

神父さんの杵ぬくさそやなど思い 同

初産へあんまり来ない大晦日 大阪市 藤留 淀月

熱帯魚反対だった妻背負い 同

戦い取るいやな声聞く十二月 和泉市 末田 晃康

ボーナスは婦唱夫随の予算組み 同

三倍になる札よ来い十二月 尼崎市 大垣たもつ

十二月左官に大工せかされる 同

英雄の墓で木戸銭払わされ 兵庫県 芥藤たけお

恩給の分だけ大事にして貰い 同

坪五万だからと持って来もされず 川崎市 赤池 五朗

御自愛を祈り己は二日酔 同

人生へ疲れて眠る映画館 出雲市 中川 晃男

お付合い専一にして二日酔 同

電化して母は炭火を恋しがり 高知県 山川 勝子

無精髭剃れとも云わず妻は病み 同

三才の知恵パパはおみやげく 羽曳野市 小串正太郎

されています。

観光ブームここにも一役フ

エニックス

推敲しながら

フェニックス植えていらっ

しゃいいらっしゃい

さらに

フェニックス殖していらいっ

しゃいいらっしゃい

南国だけをそこはかとなく感じながら

南国の晴れっぱなしで今日

も暮れ

南国の陽ざし絵になる色ばかり

どれもこれも句になってはいませ

ん。最後に別府の句。村諷子さん

の アベックは地獄めぐりも手

をつなぎ

ここでは名勝「地獄めぐり」が

死後の地獄のような錯覚をおこさ

せます。

海地獄のぬくみのうちに燕

の巣

この目で見たままの写生。川柳

味をどこかへおきわすれたような

句、団体がきたぞと狹がよって

くる

只今七百匹本堂ほっとかれ

ここでは私の句にもちよびり

川柳らしいものがあるにはありま

すが、やはり勝屋は村諷子さんの

もののような気がします。

とにかく俳句の吟行とちがい、

見たままを句にしたのでは川柳に

村諷子



きれいどこ並べて商談よくはずみ
同
パチンコで今日試される運もあり 金沢市
山本 木象
目薬も美容のうちにしてデイト
同
下駄箱の隅で夫の靴は病み 西宮市
白石 良圭
ラブレターペン先の音きこえける
同
ネオン街月もネオンの色で出る 京都市
都倉 求女
日曜はボールとバットで埋まる街
同
岩田帯のようあんちゃん白布とき 新居浜市
安藤 桂仙
ものを云う相手欲しさの猫を飼い
同
年の瀬は劫という手がほしくなり 福島県
住吉 貞坊
エビス顔ききもせぬのに金つまり
同
旅へ来て喰べる楽しみだけとなり 大阪市
福井与太郎
小包の札状孫の仮名で来る
同
正攻法で行けば途中で雨にぬれ 大阪市
西本 保夫
社員でもピンからキリのキリで居る
同
全身にサロンパス貼り十二月 高知市
須藤 俊江
薬屋もアンブル飲んでる十二月
同

来年の苦勞背負ってカレンダー 仙台市
平野 光道
さんまうましわが家へ下宿を帰り
同
病人を笑わせすぎて叱られる 松江市
内藤 喜夫
現実の流れに棹をしかともち
同
四面楚歌鼠でさえもよりつかず 箕面市
岡島 孤舟
うぶ声へもう宿命がつきまとい
同
何となく鶏もそわそわとする師走 鳥取市
近藤 昭夫
河村日満氏鳥取市議当選
当選へ名刺うれしく刷り直し
同
意識せぬ小唄が食べる芸になり 大阪市
山田 蛙水
本心に裏あり財布さみしすぎ 松江市
岡崎 雪美
胃を切って四度に食べる忙しなさ 西宮市
松島 光一
台風接近ギブスの夫と乳飲児と 笠岡市
出原 真奇
胸を病む娘紫色が好き 児島市
伊丹柳瓢子
品切れの品に未練がまだ残り 松江市
岡崎 祥月
すしの味ほめて母の恢復期 西宮市
沖吉 照児
ボーナスを斗いとれるいい身分 大阪市
山田松太郎

はなりません。随時、随所に作句しとくことは必要ですが、写真がレンズにみな入りすぎて、仲々いい作品が出来ないように、どれをけずって、どれを生かすか、あるものを写しただけでなく、どう主観を入れるか、批判するか、批判らしくなく、理屈でなくして描くか、所謂、描けなければ一人前の句とはならないのです。三カ月苦吟して、しかも川柳塔まで御無沙汰勝ちにして、もういいかげんにおクラに入れて、作句精進の本道に戻らねばと思っています。

ふり返って

直原七面山

正月休みの私の仕事は、川柳雑誌の新春号から十二月号までの中から私の句と文を一つ残らず切り取って、スクラップブックに貼り付けてゆくことであり、それら

車

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話(271)三三四四番



情熱を火山のように顔に出し 羽曳野市

橋本百舌郎

病癒え又の浮世が波高し 笠岡市

谷本鈍愚坊

停年を停年のない農が待ち 七尾市

松高 秀峰

他所の花赤いボーナス聞かされる 河内長野市

森本黒天子

物忘れ貸金だけはよく覚え 神戸市

吉田 隆史

兎飼う子供の夢は大きすぎ 笠岡市

佐内 隆文

倅せになろうと云って他家へ嫁き 羽曳野市

阿賀みどり

二十四時心臓の動きに手をあてる 大阪市

山地 判志

暮れの町ボーナス族がうずを巻き 京都府

西村句楽坊

すれ違ひしても匂わぬ脚線美 茨木市

高木繁太郎

覇気見せて試筆の墨をすりかかり 羽咋市

三宅 ろ亭

星くずの一つが未来のハズバンド 羽曳野市

宮西 弥生

大原女のあの荷で生計足るのやら 大阪市

万代句念坊

豊年の妻美しくパーマあて 羽曳野市

岡本紀太呂

中島生々庵先生御夫妻御来諫

往診にチョット来たよな旅の人 藤原市

川岡美寿栄

水漬をすってサントラのチンドン屋 大阪市

阪本 時二

ひとごとであっさり見切りつけたり 大阪府

石田 新石

胃の悪い家主の庭の柿が熟れ 宮崎県

野口卯之助

元旦に年令がふえない有難さ 大阪市

宮尾あいき

おさらいの自信あくびで締めくり 玉島市

水粉 千翁

流れねば橋が直らぬ税納め 島根県

景山 綾美

スモッグの殺人何処へうったえる 大阪市

福富 隆子

橋出来てから栄転の渡し守 松山市

河本南牛史

地味好きじゃないけど歳が過ぎ 布勢市

米田 美夫

鬼共を待たしパチンコ屋にかくれ 金沢市

根上 杏花

釘一本打つのに手につばをつけ 羽曳野市

大谷 権雄

母親の愛が重荷の一人っ子 西宮市

鶴飼 鮎子

アベックへベンチをゆずる老夫婦 今治市

越智 一水

閉山に刃の如く冬将軍 福岡市

小田 無限

仮病とは知っていないながらくる見舞 豊中市

稲増 久雄

免許証持たない肩身の狭い仲 岡山県

岩道 博友

不景気も何処吹く風と七五三 大阪市

和田 旋鳳

意味深長うちにや五票もあるけ 和歌山県

隠岐 不酔

の句の一つ一つに付いて、独り静かに句の出来たいきさつなどを思い浮べながら、ニンマリとはくそ笑んでみることであります。句は六十三句あり文は五回載っています。

これらの句や文は、少しでも川柳のお役に立ったであらうか。

どの一句一文を取って見ても、作者である私にとっては、いずれも価値あるものであり、その良さも充分噛みしめてみる事が出来るのであります。果して柳友諸士には……。

さて少し自惚れを許して頂けるなら、次の句だけは七面山の作品として、是非皆さんの記憶の中にとどめておいて頂きたいと思えます。

男みな汚なく見えて恋を得ず
帯しめて女こころの安らぎを

私の日とてありませなんだ
と妻の愚痴

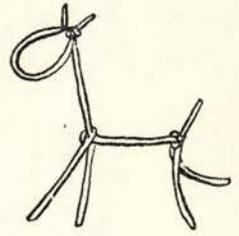
銀が泣いてる〃と三吉の独り言
黒を着て女静かにタバコ吸う

もう一押しされれば落ちた
にと妓

イナゴ一匹姿も見せず秋静か

もし私の句境にこの一年間の間に少しでも進歩があったとすれば、それを裏付け、それを支えるものは、これらの句より外なものには……。

チーコと コロ



東野大八

ほとくの家には一尾の犬と、一尾のネコがいる。
犬はスピッツのオスで、裏の家から子供がもらってきた。白い毛糸の塊りのような小犬で、可愛い黒い眼をしきい気らしく動かして、少し斜すちよにほくをみた。それが斜に入って置いてやることにした。

ネコはチーコという。十年近くも世話になっているから、と駅前自転車預りのおばさんが、大事そうにくれた。三毛のすこく可愛い子ネコなので有難く頂いておくことにしたら、残念ながら家に着

いてみたらメスだった。大体ほくはネコが大嫌いでである。これまでネコなど飼ってゐる気もなかったが、凄じいばかりのネズミに閉口した挙句、かくは親念のほそをかんだ次第である。六十年以上も甲羅を経たわが家の古材木をいことに、ネズミ族のしようけつぶりはすこく、中にはネコほどの背中にスギの木でも生やしたようなのがいる。そいつと夜半の茶の間でよく対面したが、お前がこのおやじだそうだな、といった面つきをしている。こんな親分だからその家族も家族で床下は冷えていけねえ、とほくの寝ているまくら許の押入にあつたナ、しくも菓を張る始末だ。そいつらが春先になると悲鳴というか喜悅というか派手にキーキーふざけ回る。とうとうこちらが音をあげてネコを置く気になったのだ。効果はてきめん今ではそのチンピラ野郎共はながのわらじをはいてしまった。

コロもチーコも今ではりっぱに成人して、すっかり家族の中にとけこんで至極おちつきはらつていて。犬好きは犬が知るで、コロはほくを家中最大の主権者として大いに奉つてくれる。そのおかげで三角形の屋根をつけた寝箱を作つてやり、ペンキをぬって堂々たる一戸を構えさせてやつた。りっぱな大小屋なので子供たちがカマホコの板を屋根びさしの軒につけて「サンセット77」と書いた。

チーコの方は、女たちの人気と寵をあつめて、若屋夫人みたいにぬくぬくと取りかえっているが、多にほくの近くにはよらない。少しごきげんななめだと土袋みたいにはうり出したり、いたずらすると首つ子をつかんでたたきつたりするからだ。時々ひまつぶしに膝の先に据えつけてニラみつぶせと、首をちぢめて下眼づかいにチラチラとほくの顔をうかがう。

「こういう面つきの飲み屋のばあはネ、病気でおれが家で寝ていてもバスに乗って借金取りにくる奴だ」と家のかあちゃんに因果をふくめるようにいえる。そのいい方がギスいとみえてネコの奴太い尾っぽまで腹の下に蔽い込んでひたすら恭順の意のあるところを示さうとする。ハラのうちでは激石のネコのように「苦沙弥亭主」とおだ名をつけて小ばかにしているかもしれないが……

このチーコが去年の秋に子ども四尾を生んだ。黒と白のまだらな奴なので、此奴の彼氏はタネ牛じやねえのか、とほくがいったらそのうち三びきが居なくなつて一びき残つた。ところがよそから同じような子ネコをくわえてきて、自分の子のように可愛がつている。こどもは一びきにマル、一びきにベクとつけた。面白い名前をつけると感心したことだが、ネコ可愛がりとはよくいったもので、この二ひきをチーコはみるも涙ぐましいほどのいたわりと気の使いようをする。ナメてナメて、暇さえあれば小わきに抱え込んで身体中ナメ回す。そして一寸したことがあ

ると安全な場所へ子ネコの首つ子をくわえて運んでいく。いいものをやつても子どもにやつて眼をつむつて我慢している。やせたそうしたチーコをみているとこちらでも哀想になってできるだけ少々のことがあつても大目にみてもや

この点コロは公明正大で、玄関口に大グソをたれたり、土間一ぱいに雑布バケツをひっくり返しえたような小便をやらさず。ほくをみると泥だらけの足でとびついてすきをみてはペロペロとやる。そのくせ知らぬ人がくると噛みつきそうにはたぬて、ほくがそばにいと一段とより勇しく武者ぶるいする。叱ると小さくなつてしよげかえり、おだてると始末の悪いほどのハネかえりをやつてみせる。

ほくがこの犬にコロとつけたのは、そのかみ家にいた犬の名からとつたものだ。この犬は素性の知れない雑犬で、茶色の不細工な身体つきのメス犬だったが、ほくにひどくなつていた。夜勤帰りの冷たい雨の夜にもはるばる遠くまで出迎えにきてくれた。距離がすぐく離れていく場所、いきなりタンタン甘えてペダルを踏む足にとびついてくるととき、われ知らずほくの胸はかっとなかぬものがわき上つてきたものだ。

ところが人間といつしよで、死んだ男の後添えにはなるな、という下世話通り、今のコロはスピッツという洋犬のくせに少々ニブイようだ。単純率直なのも小気味よいが、繊細功手なところが無いので情味がわかない。ムードのある犬はたしかに名犬だというほくの犬は哀しみにコロは失格である。名もない雑犬でも万金の洋犬より格段の利発さを発揮する例は多いが、人間も犬も毛並一つで論断する危険性は避けたいものだ。

「むかし、満洲でドイツ人の家に寄宿したことがあるがね。そこにいたテリアはほくのたべたものは、よしそれが好物の肉であろうと魚であろうと見向きもしなかつたものだ。なるほどさすがピクターの犬だと感心したものだ。第一、主人一家の言葉しきかかない点などりっぱなもので。奴、ドイツ語にたんなったのわけ。」
とうちのカアちゃんにいったことがある。社の近くの家のラツシーというシェパードは、子犬のときに一万円で買った犬だそうだが、根っからのバカ犬で芸事は一切だめ、通くの肉屋のみつともない黒犬に近づくと、その栄養のいいメス犬に片足を食われて一生チンパで世を送っている。

最もネコ賢うしてお家騒動のタネになるより、犬は大らしく発らつとしてバカの方がトリエがあるらしい。動物であまり利こうすぎるといつか人間にうとまされる。その人間とても相手が人間並以下の動物であるところが、安心して飼っていられるのであろう。

評句

リレー



八尾市

西尾 榮

岡山県

田垣 方大

米子市

小西 雄々

石川県

関戸 宗太郎

靴はいてるのに話むし返

柔一よくある情景。下五のむし返して救われた。念を押し平凡だ。席題吟の佳吟位かね。

方大―前評と全く同意見ですが、このような現象を起す原因を試みに解析してみます。

(一)主客に共通した良い話だろうか。悪い話だろうか。

(二)主客のどちらか一方に良い話だろうか。悪い話だろうか。

(三)主客の性格による現象なのか。このように分析してみると。この句からは(一)(二)項の話の良否ということとは考えられない。まあ良い話の方にウエイトをおいておいた方が明るくなる。そうなるこれはどうしても主客の(この場合主人側)性格からくるものと解釈し、一度さようならをしてから追打ちをかけてくる主人のしつこきにユームアを見出したい。

雄々―私は、下五「むし返し」で、話も一応ついたので、帰り支

度をして靴もはいたのに、まだくどくどと、同じことを繰返して話すので、大変迷惑になった―と、解釈した。汽車や電車に乗る時間がないときなどは尚更で、「早く話をやめてくれないかなア」という気持ちまでわかるようである。いずれにしても席題吟の佳吟は十分である。

宗太郎―人間の弱さ、疑心をまざまざと見せつけられる佳吟、「呉々も御願ひ致します」「大船に乗った気持ちで」と一応話の結末がついて帰りがけ靴ペラを渡しながらかもくどくどと念を押すのは日本人の美德の致すところだろうか、それでも上は代議士から下は村会議員に至るまで、靴をはいてしまおうとけりりと忘れてしまふのは日本だけのことだろうか、嘆かわしいことです。

柔一むし返しという言葉は悪い方に解釈する。いずれにしてもむし返し効いた句だ。方大―こういうことは誰でも一

度や二度は経験していると思うが、なかなか描写が難かしい、それをうまく十七字にまとめている。うがちの句である。

雄々―念には念を入れて話をむし返したのではなく、くだらんことを何度も繰返すので、靴を履いたのに帰ることも出来ない。と多少腹立たしさももうかがえて面白い。今回の句の中で一番いいではないですか。

宗太郎―むし返しという言葉はふだん喧嘩。口論。愚痴。等悪い方に解釈され易いが、靴はいていてるのの場合にはたいがい悪い方で愚痴ぐらいでしょう。玄関まで送って出て話をむし返す場合、喧嘩、口論の相手は先ず少なからず。吉報を期待する余りについどうくなる場面をたまま見うける。悪い方に一方向的に解釈するのは危険ではなからうか。諸先輩の尻馬にのるわけではないが佳吟である。

これからは夜とネオンが動

旅風

き出す
柔一この句擬人法にして、これからは夜よとネオン動き出し、としては如何だろうか。そうするとネオンの文字がアルサロやキャパレーの広告ということにもなるし、でなければ原句の儘じゃ平凡だ。

方大―夜は心身共に休息の時であるが、ゼニのない奴は膝小僧を抱えて自宅にゴロゴロしているし、景気のいい奴は誘蛾灯に魅せられた虫のようにネオンに集まってゆく、ネオンがこれからは俺の世界であるぞと、誇示してちよっぴり世相をのぞかせているが、私にはそれ以上深い意味が感じられない。句のリズムも少しギコチない。

雄々―都会は深夜喫茶まであって、夜ともなればネオンが点滅して、移り時であるが、それを「ネオンが動き出す」で、言いつくそうとしていたが、句全体が少し迫力に欠けるように思う。然しねらには好感がもてます。

宗太郎―柔さんのお説の通り擬人法として「これからは夜と」よりも、「夜よとネオン動き出し」でこの句はうんと引き締まっています。雄々さんは「ネオンが動き出す」で都会の夜を言いつくそうとしていると指摘されておりますが、この句にはそんな深みは感じられません。点滅する盛り場のネ

オンをひよいと軽くあしらったように思えます。
柔一宗太郎さんの賛意を得て心強い、でも人様の句を勝手になおすことが出来ないから敢えて批評すれば句が間延びしているのではないか、

方大―無理をすれば「ネオン動き出す」に意味を見出せないこともない。即ち、「夜の蝶」「夜と悪」「夜と享楽」「夜と酒」等々、これらをひっくり返してネオンで代表させているともいえる。然し夜とネオンは同意語といえるから「夜」を行動的な字句に変えれば、もっと迫力のあるものになるのではないか、

雄々―難かしい論議になりましたが、都会では昼間より夜間に活動を開始して稼ぐ人が沢山いるわけで、それ等の人がネオンと共に動きだしたと解釈しているのですがねえ。
宗太郎―日暮れと共に一斉に輝くネオンの数々を通天閣の上から見おろせば他国者には感じられない生存競争の厳しさが七色に輝くことでしよう。然しこの句から余り多くを望むよりも観光団の田舎者の一人になって別な眼で都会の華やかさを見つめてみたいと思います。
話題なくなつてキッスを許したり
涼 髪
柔一下五の許したりで二人は初

めてのキッスだろうね、初めてのデートで話題が途切れてあたりの閑かなムードにこんな気持ちも出るだろうな。句の上で、話題なくなくなってのようになってが些かまずいようだ。其の道の大家方大先生御経験上如何です。

方大―大家とは恐れ入りました。ところが私はこんな経験は残念ながら一度もないのです。実はやりたくてもやれなかったので、欲求不満をフィクションの句を作ることによって自分をだましてきたといえます。余談はさておきましてこの句は愛情に弱い（否強い）女性心理をうまくとらえてはいるが、ムードの割に露骨すぎる「話題なうなつてくちびる寄せ合いぬ」ぐらいやわからなく表現した方がよいのではないか。

雄々―「話すことがなくなったのでキッスを許した」と、なる、初めてのデートではないが、キッスは初めてのように思いますが、勿論、私自身経験はないので、あくまで臆測にすぎません。女はムードに弱いといわれているが、甘い雰囲気がかがえる。

栗氏の言われるように「なくなつて」が気にかかります。

宗太郎―互に話題がなくなるのを待っていたかのように唇を寄せあう美男美女。これはナイトショー向き映画で固唾を飲むワンカットである。戦後キッスぐらいとキ

ッスが軽視され、お別れの握手ぐらいい思われ、進歩的男女に乱用されるきらいがある。でもこの句の二人は案外純情派であろう。

栗―方大さんの家庭争議でも起すようなことを言ってますまん。すまん。雄々さんも未経験を主張しておられる。話題なくなつては男の方の策略かも知れんね、さすればキッスを許したりは女側からの言葉のようにきこえるけれども、話題なくなつて女キッスを許したり、と女という字を入れてみるとこの雰囲気解るのじやないか然し涼髪さんは女の方だったら女性側から許したことになる。ハテサテ、然しながらキッスを許したりのをは冗漫だ。まてよ、涼髪さんが女性ならキッスを許したりての字がある方良いな、之は作者の性別が先決だ。

方大―作者が女性であれば男性として尚更楽しい句であるが、作者が男性であっても亦こじつければ客観句としてもうけとれる句である。男性の場合「話すことがなくなったら彼女キッスを許しおつた」というような意味にもとれる。勿論どの場合でも能動的な男性から誘ったとしても、心よく受け入れられことは事実なのだから、我々としては楽しい句である。

雄々―作者の性別まで飛び出しましたが、この句を繰返して読むと男性のようである。若し女性の

句であれば、下五「許したり」がおかしくなってくる。

然し、いずれにしても句評のむずかしさを痛感する句です。

宗太郎―作者とは面識があり、今更性別の詮議をするまでもなく純情な美青年で北国柳壇の文芸賞を受けた優秀作家である。作者を知っているからではないが、この



川柳作句の心構え

—富柳会員に与う—

八木摩天郎

川柳は文字の芸術である。文字の使用に依って、目に受くる感じ、音律に依って耳に触るる感じ、或いは間の長短に依つても、其緩急の感覚に相違するのは勿論である。しかし、川柳を作句するものは、須く、フローベルの言える如く「一つの物を表現するには一つのし言葉かない」と言う、一物一語、どの文字、どの言葉を持つてくれば、自己の発表せんとするに適合せる表現であるかを考えねばならない。

このフローベルの一語説は、将棋の駒の動きにも、囲碁の一目の布石にも、これが唯、一つの石、一つの駒で、これ以外に方法がな

句に売春のないやらしきがない。また映画にたとえて申訳けないが、戦前は手を握りしめ男の胸に顔を埋めて恋愛の清らかさを表現したが、今ではキッスシーンが平凡とアップされ観客も平凡と観ているように時代のうつり変り作家も遅れずに付いていかねばなるまい。

(担当、真鍋一瓢)

いという道を選び出す苦心と、川柳作家の一字一句を選び出す苦心と相通するものなのである。独逸のヘッケルは、一枚の木の葉にも個性を有し、大森林に於ても二枚と同じ葉を発見し得ないと言つた如く、海浜の貝殻、路傍の石にも、一つにして、一つに限る姿がある。

かく思うと、川柳作家は、偽りなき自己の魂の表現で、自分は先人が発見しなかつた境地、又、先人と違つた表現の仕方をする処に苦心があり、練磨を要する。

川柳は創造の文芸である。しかるに年々四十万句の川柳が生れて

後世に残るだろうか。それは偽りなき自己の魂の表現であるか。自己をよく凝視した作品であるか。懺悔街道を往く自己の姿であるか。その句が、形式に、音律に、表現技巧に、用語に、推敲に、遺憾なきかを、よく考え、燃焼している作品だったか、どうか今一度、再考すべきではなからうか。

川柳は鍛えられた精神をもつて、真実一路を探索する日本人独特の文芸である「いのちある句を削れ」、川柳から心を放すな、常に句に澆濁たる生々とした句、「非凡なれ」の路郎先生のご教示に、果して添い得る者幾人ありや、おそらく皆無に近いのでなからうか。私自ら省りみて、恥しくならざるを得ないのである。而し

味の七-

モダン 川柳

へ東辻の北丸大橋心

御門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい

て、路郎先生は、その著「川柳とは何か」に多読多作なれと説き、人生を凝視したオリジナル(独創的)な作品を目標に一句一句の内容を批判的に読むと同時に、その句の表現技巧に眼を止めて、常に、よき句を作るようと書かれて

いるが、これ又、私は敢に多読多作をしていると、はっきり何人が言い得るだろうか。しかし、我々はプロではない、職業川柳家でないのだから「趣味の域」は脱却し得ないが、単なる趣味で了らせ度くないと思う。

「小さな玩具」として、もてあそぶことに反撥して、少しでも、いい句を作りたいとは万人の望むところ、われわれの川柳道の拓け行く道も、そこにあるのではないか。「餅は餅屋」どうせ初めから、いい句は残し得ないのだからと頭から撥ね返す人は、あわれなのである。去年今年、昨日より今日と日々又新に、いい句を作る為に、近寄るには結局は、先生のよく言われるごとく、川柳に熱がなければならぬといわれる。「熱の問題」なのである。

忍耐をもって対しなければならぬ。強い意志を持って奪取しなければならぬ一つの対象である」と説かれていたが、これも単なる平面の描写でなく、素材から少し離れて作句し、説明に落ちては平凡に了ること。「物吾一如」自分がそのなかに溶け込み、打ち込んで行つて初めて、その境地が見出せることを言ったものであろう。

又、早大教授杉森孝次郎氏は、「詩人は、直に、人、物、事象の真実を見る。したがって、詩人が見た人、物、事象には、客観的、内在的批判がある。ペーソスまたはヒューマニズムも、ここに必然的に機会をえる。物自身の本質からなる、その現象に対する批判だから、その批判は軋らない」と言い、自己を偽らずに発表することは詩にとっての生命の一要件であり、注意の向かいどころ、経験に対する選沢のなされかたが、詩人の力量を測定する一目標だと説述されているが、かつて、室町時代の連歌僧心敬作の「ささめこと」という本の中にある「仏法に最上醍醐味といえる、いかにも練れたる心というなるべし」とある通り、この練れたる心というのが、川柳作家の句作の心構えであり、鍛練された表現も作句の心構えであり、ジッと何かを発見するまで凝視することも、川柳作句の

心構えであろうと思う。ふと眼をやれば煙突にけむりなし 路郎 君見たまえ渡菰草が伸びている 路郎 みのむしのなんぼははっても壁だった 豆秋 など、味うべき句で、よく中心点を凝視した、そのいい例であらうと思う。

最後に、Civis Romanus Sumus、シピス・ローマナス・サム。昔、羅馬人は、われはローマ市民なり、斯く言えば、いづこの人間も皆恐れをなして無礼を加えなかつたのであるが、今日われは松山市民なりと言えば、俳聖子規や、漱石を偲ぶ如く、われは富田林市民なりと言えば、川柳の結末に、堅きスクラムを組む都邑を思わしむるよう、望むや切なることを附言して筆を擱く。



「有情」随感

薫風子さんが彼の第一句集「有情」を上梓されて数ヶ月になる。一般の評判がたいへんよいそうでわがことのようによこんでいる。本書の批評については十二月号に春葉さんのりっぱな書評があり、今さら私などのつけ加える何物もないが、蛇足を承知のうえで、私の感じたところを随想的に述べ、この壯図を祝したい。

著者は新進作家で繊細な新感覚の持主であるとは「有情」紹介のことばであるが、薫風子さんがユ

哀感

善意

早川清生

泣く、もって人間の心の奥深いところから湧き出て、しかも知性に支えられて事物の本質に迫るものでなければならぬ。川柳は本来批判詩であるが、彼の場合これが天性の感覚とみごとに融合して批評精神を内蔵した新しいリリズムをみごとに打ち樹てたことは敬服に堪えない。

ニクな抒情と透徹した感覚をもつ柳界稀有の存在として、川雑の中でも一つの高い峰を形づくっていることは誰もが認めるところであらう。

牛小屋に月光美しき浪費 都会の夜セロリは母の香に似たり 従来の抒情は感情の流れを再現して、ある場合には感傷的なムードを展開し、その雰囲気の中へ読者を誘いこむものであったが、新しい抒情はそういった甘美なもの

四面楚歌 故郷は豆の花の頃 彼の作品は耽美の直前で踏みとどまって、今までの、そして彼以外の作家には見られなかった新しい境地を創り出している。彼が旅行吟を多くし、また素材を多く動物の上に求めていることはこの句集で初めて知ったが、その場合でも決して表面だけの描写に終っていない。

労働歌 蟻が歌えば凄かろう 檻の鶴 又 眼を閉ずるばかりはなし すべて詩が感動の再生であることに異論はなからうが、彼の川柳は哀感と善意にその基調をおいている。しかも近代の市民性を背景とし、通俗を極端にいむ彼の作家精神はこの句集にもよく横溢し、皮相の低俗な興味や腫瘍のような社会悪の描写を決して採らないのはいさぎよい。彼の場合モチーフ

は

を誰もが気づく身辺の些事に求めることが多いが、それでいて低次元なトリビアルに墮せず、誰もがなし得ない次元高い抒情を深癖なまでに正確な語彙で詠い上げてい

酒の手のあがりしのにに四
十過ぐ
わが妻になすべかりしを賀
状書く

私などあるテーマを得て作句する
とき、ともすればそれに適した
人物を設定して安易に句をつく
てしまうが、彼は常にテーマを身
にひきつけ、多種多様な人間を職
業や風貌によって類型化してしま
う危険をおかさない。しかも素材
を常にその性格を熟知した自分の
生活につながるものの中から選
び、それでいて作品に深さと広
りを失わない。生活即川柳は彼に
おいて実現した。このため必然的
に家族を詠うことが多くなるが、
その反面自身自身を詠んだ句が甚
だ少いのはどうしたことだろう

父と来て ずっと風呂敷持
たされる
継母の思い出に 針 つき
まとい

妻の留守 食パン真ッ直ぐ
に切れず
暖い書齋 麻疹の子にとら
れ

先に述べたように彼の句は哀感

が基盤となっていてるので、飄逸なものはあまり見当らない。これは彼が川柳を真にまじめなものと考へている証拠でもあるが、数少ないとほけた味わいの句においても、その底に人生のさびしさが脈々と流れている。

焼跡の凹んだ鍋で湯を沸し
商いのラムネ一本抜く暑さ
愛の巣を私立探偵見上げて
る

従って明るい句というものも少
く
シヨクです などと 抜
擢うれしそう

などは稀な例であり、しかも明
るさだけでない。それでいてやたらと深刻ぶった句が少いのもうれ
しい。句品のよさも柳界随一
で

竹植えて 雨うつ音を染し
めり
雑念をしずめる丸さ、壺は持
ち

といった格調の高さである。こ
のような句の性格から「さびし」とか「わびし」とかという観念的な
字句が数多く使われているが、こ
ういった言葉にもう少し詩的酸酐
が加われればさらにすばらしい句が
でき上るのであろう。また頭の回転
の速さはときに才智のあふれすぎ
た句を生んだりするし、また彼の
作品に物語性や社会性が乏しいこ
とは彼の作風から自然であり決し

て欠陥でないが、逆に彼にまだ伸
びる余地の豊富にあることを示し
ている。

個人句集は共同句集と違ってい
ろいろな利点をもつ反面、ともす
れば単調に流れて読者を倦ませる
嫌いがあり、私などのように柳歴
の浅い者の場合には終始緊密感を
保ち得るかどうかが大いに懸念さ
れるだろうが、彼の作句年数に比
し「有情」がらっぱにこれを克服
しているのはまったく日頃の研鑽
の深さを示すものである。私は彼
の生活をほとんど知らないが、編
集部では川柳推進のエンジンとな
っており、平素の研究も勉強家が
少いと言われる柳界では貴重な存
在である。また句集として装幀や
選句やその配列に苦勞され、統一
したカラーを保とうと努められた
点が十分伺われ、一ページに關連
のある句を三句ずつ配置した方法
は連作にも似て句が互いに引き立
て合いハーモニーを奏でて効果を
高めている。余事だが発刊のあと
で彼が少し体を痛めたことにもご
苦勞のほどがしのばれ、ご健康を
切に祈る。

しかし彼の句風をよくあらわし
ている
牛の背で笛吹く恋がしてみ
たし
除夜を聞く一つの旅を終え
しごと
紫の椅子の愁いはわが愁い

などの句が洩れているのは選句
の事情か、彼に何かの意図があっ
たのか知らないがさびしい。対象
を常に自分の眼で見、自分の句に
ついて、あるいは川柳そのものに
ついて語るべき最も多くのものを
もつ彼が常に沈黙を守っているの
は残念だが、この句集が記念出版
でなく自己の作品の一段階を示す
ものだと言われるのとおり、この刊
行を契機として彼がオリジナルな
個性に一層磨きをかけ、妥協のな
い、しかしゆたかで清冽なロマン
の精神をさらに伸ばしてめざまし
い躍進を続けられることを心から
期待している。

推薦、文部大臣鳩山一郎。賛助
員、麻生路郎、大谷五花村、川上
三太郎、岸本水府、小林不浪人、
阪井久良岐、篠原春雨、高木角恋
坊、西島〇丸、藤本福造、花岡茂
三郎、木田溪花坊、前田雀郎、村
田周魚、安川久流美、和田一郎、
井上剣花坊、岡本映米、編纂顧
問、帝国大学教授文学博士、藤村
作、国学院大学教授文学士、山崎
藍。監修、法学博士、岡田朝太
郎。編纂委員、海野夢一仏。文学
士、高阪太郎。

★こんなことでは売れないとい
うので、急に賛助員を下巻で発表す
るなど、全く士の商売だったので
あることが知れよう。

★昭和八年九月廿八日発行。非売
品で著者高阪太郎となっているこ
とは上、中と同様である。四六版
一〇一二頁。発行所は東京市芝区
新橋六ノ六六、万文社、柳多留全
集刊行会となっている。財政的に
編纂の上になかに混乱をきたした
かが目に見えるようである。しか
しこれだけのものを、とにもか
くにも残してくれたことは感謝の
外ない。

川柳雑誌社特製
投句用 柳 箋
一冊(五〇枚綴)三〇〇円
送料(一冊分)二〇〇円

続 川柳書架 (27)

誹風柳多留全集 (下)

★本書(下巻)の目次は百十四篇
から百六十七篇までが収められて
ある。これで本書が全集の名には
しないこととなるわけだが、上中
下三巻とも、風教上いかがわしい
語句を削除したことわり書きがあ
ることを知っておくべきだ。

★本書には柳多留全集刊行会の陣
容ともいべき一ページが掲載さ

らる。

り。

り。



別府城島高草に於ける生々庵医博夫妻

川柳紀行

ふたり
どうちゅう ゆかりのおもかげ
二人道中由縁佛

(承前)

中島生々庵

雲仙
長崎

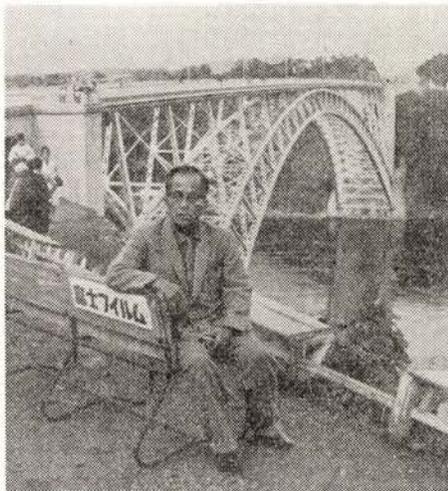
雲仙は昨日に変わる快晴である。ホテルを出ると周囲の山々は勿論のこと、遠く島原から天草の島々にかけてはつきり一望の裡にある。「雲か山か呉か越か 水天劈 鬚青一髮」の天草灘がそぞろに詩情をわかす。

島原の棧橋から雲仙のホテルまで一時間足らず。海拔七〇〇米のホテルで一風呂浴びる。暫らく休憩して間に雲の切れ目から陽がもれてきた。早速宿のドテラのまま地獄めぐり、狭まい地域に噴出する湯煙の箇所が多く、その間をうまく利用して近代式ホテルや土産物店が賑わっているのは別府や熱海等と違った趣きを与える。

車は島原と反対のコースを降りて長崎に向うのであるが、途中にある愛野展望所は千々岩湾を眼下におさめ、どのバスもハイヤーもしばしとどまってその絶景に見とれるそうだ。やがて橋中佐の生家のある千々岩村に着く。中学時代修学旅行で中食の弁当をお庭先きで頂いた記憶が蘇ってくる。生家のすぐ下に橋神社があり社頭に中佐の銅像が建てられている。

やがて諫早である。柳友川岡壺眼子を思い出し、車をとどめて石段を登り小高いお宅を訪ねるとすぐ近所まで外出で留守、夫人に電話連絡して貰うて石段を降りる

とそこに現われた初対面の壺眼子である。車の傍の陽だまりに立つたまま握手をすればもう十年の知己である。路郎先生のお噂、香林氏夫妻追悼句会の模様、淀川支部の様子等々も沢山のお話を、および腰で一くさり。別れを告げると稍けしきばんで引きとめる夫妻を振り切るように車に飛び乗り、二時間ばかり遅れたスケジュールを取り戻すべくスピードを出して長崎に向う。快適な道路と天候に恵まれて四方の山並みや、柿の色が無精に嬉し



佐世保西海橋にて(生々庵氏)

い。チャンポンは格別である。勿論私にとっては若い頃の郷愁も手伝ってのことだろうか、一かかえもあ

る井を小石でさえ大略平らげるところから見ても先ず他に類のない味である。文字通り長崎の味である。車は観光順を辿って西の方から崇福寺、おらんだ坂を登って大浦天主堂、グラバー邸と案内して呉れる。オランダ坂は昔の記憶にある静けさは今その影をうかがうべくもない。団体さんのざわめきだけが気になる。「春雨にしばらくぬるる」の端唄を思い出させる丸山あたりも、江戸の吉原と共に昔話のあなたへ押し流されていくようだ。リバイバルブームも所詮は力の限度があることと、古い長崎の街に来てしみじみ感じられた。しかしさすがは三百年の伝統は根強く大和路にでもたがうような高い香りに似たもたがう旅情を慰めてくれた。出島や繁華街を通りぬけて浦上に入ると今は平和公園と呼ばれる原爆落下中心地に着く。すぐむかいに有名な平和記念像が世界永遠の平和を祈念しながら両手を大きく上空と左へ伸ばしている。この記念像に抱きかかえられるような位置に、寂々としたたすまいで永井博士の如己堂(によこどう)がある。三畳敷位の書齋に博士の仰臥像とデスマスクが安置されている。ここで「長崎の鐘」が執筆されたかと思うと合掌した博士の像にこちらも合掌の涙が宿る。観光客のざわめきから離れて静かに眠らして上げたいとも思った。車が辻を一つ曲ると新装なった天主堂がそそりたっている。仰ぎ見て何となくそら

白煙蒙々新婚さんの大膽な記念写真地獄の煙でちょんぎられ



別府城島高原にて（生々庵氏）

ぞらしい感じを禁じ得なかったのは何故だろう。
挨拶はぬきで柳友師の噂御好意を無にして帰るスケジュール
郷愁がやっとチャンポンの味で癒え
おらんだ坂観光の群れにすりつづれ
グラバー邸お蝶夫人も招き入れ
如己堂の静けさ観光から護
類落ちて愛だけ残るデスマスク
永井隆の表札そのままデスマスク

佐世保

の市である。佐世保は私の中学時代五年間を過ぎた第二の故郷であるが勿論こんな大橋は夢にも存在しなかった。街に入ると長崎とはすべてが対蹠的な土地柄である。昔軍国調華かなりし頃、多感な中学生は夢多い青年として育ったところである。ホテルにクラスの人達が集って来て思い出草に夜が更ける。四十七八年振りで会う顔も見える。
翌日は私達夫妻のために一人の友人は自家用車を提供して呉れ、他の一人は忙しい中を半日案内の役までして呉れる。みんなの厚い友情には昨夜からしみじみと打たれるものがある。ここは母校佐世保中学校である。橋を渡り小坂を曲り石垣に添うて校門に着くまでの追憶、校内に入れば私達が卒業記念に植えた楠が鬱蒼と枝を展ばしているではないか。あれから凡

そ五十年、楠の年輪が私の老化を笑うようでもある。これから五十年も百年も三百年も三百年も繁つてゆくことだらう。悠久な大

自然と朝露の如き人生。一瞬感傷的な気分がこみあげてくる。車はやがて鶴戸越えから鳥帽子展望所に着く。九十九島の絶景が一望の間にある。松島の箱庭式に比すべくもない雄大そのものである。遠く五島列島まで見えるようだ。東洋一と称せられた私の記憶の軍港には鐵艦巨艦が黒煙を立てて碇泊し、若かりし中学生の胸をたかぶらした光景が今はつきり蘇ってくる。
駅に着くと昨夜の友人達が又揃って見送ってくれる。名残りを惜しむ発車ベルに又しても臉があつくなってくる。二十時間余りの滞在時間が忘れ得ぬ「ゆかりの佛」となりそうだ。達者でね。
街々が郷愁と遠し二十年懐しさ校門近く曲り角九十九島かすむは郷愁の涙らし
発車ベル佐世保ことばで又の日を

佐賀

佐世保から佐賀まで一時間半の準急であるが、途中下車して二年振りの墓参である。田舎の道はこ道を小型自動車にゆられて、父母眠る菩提寺へ。この道もあの道も母に連れられてお詣りしたお寺への道である。歩きながら話してくれた母の言葉さえ、耳に聞えてくるようだ。途中の茶店で一服するのが子供の弱い足には楽しかった
思い出でもあるが、その茶店は今日の自動車路から見えないだろうか。母がなくなつて一人でお詣りする時も、他の人とお詣りする時も、必ず母と一緒に詣りする時もある。気がするのこの道である。「お墓詣りはいいものだね」と小石と話し合いながら眺めるお寺附近のたたずまいも、遠くの山なみも余り変っていないのが嬉しと思う。
待たせてあった車で佐賀のホテルに着く。ここでも私達夫妻のために私の小学校のクラス会が持たれることになっている。もう大分集っている。町の助役さん、議長さんまで酒を提げて参加してくれる。明治三十八年に小学校に入學した者同士で三八会と名付け、今では町でも評判な程仲のいいクラス会、私の帰郷する度に集ってくる。面白いことにクラス会といわず同級会というところまでしみみ田舎の小学校の年老いたジジ、ババ達という感じが盛り上がってくる。「お前と教室でならんどったけん」今は大っぴらに五十四五年前のいじらしい恋心みたいなものを打ち明けて盃を酌み交わしたり、童心に帰るといっても、これ位童心に帰る会は又と外には見当らぬ。何れは一人欠け二人欠け榎の歯のようには朽ち落ちてゆくであろうに今宵一ときはすべてを忘れるの大賑わい。散会を宣する幹事さんも辛らそうである。
ふるさとよその山なみを崩すまじ

父母眠るここふるさと秋豊か尉と堀尊常四年の恋心

別府

早朝宿を立てて愈々別府である。九州北部を三時間で横断する「由布号」で久留米、大分を経て別府に着く。
会場に当てられたホテルの大広間。大学を出てから三十八年目のクラス会であるが、夫人同伴の原則を守って観光も兼ねて一兩日前から集っているのも多い。卒業後初めて会う友人もあり、おみそれ同士、名乗り合い、最後には抱き合つて喜んでいる。
やがて開宴ともなる。世話人が一年前から企画してくれた効あつて午前中の観光と併せてその賑やかさ。同伴した自分の妻君を各自紹介すると妻君は立って一礼する。その度に破れるような拍手が起る。なごやかさそのものである。宴が終ると仲のいいどち個室に入って深夜まで語り合い、妻君連は妻君連で初対面も忘れての打ちつけ振りである。こうして忘れ得ぬ思い出の別府の夜が明けた。
翌朝はつきぬ名残りをロビーで惜しみ飛行機、汽車、船と思ひ思ひの帰路についた。
私共夫妻は五時の船に乗り込むというのでゆっくり高崎山のお旅さんと遊んだり、九州ならではの草原美を拡大に展開する城島高原に車を進め、山上湖である志高湖



別府航路さくら丸の甲板にて(生々庵氏)

に心ゆくまで静かな景勝と環境に酔うた。由布・鶴見、扇の三山が端麗そのものである。

街に戻り残る時間で土産物店街を歩く。ここにも私の嫌いな名の銀座通りが幾条もあって俗悪な湯の街風景であるが、さすが貫祿十分、古い泉都という感じである。

お見それへ僕や僕やとはがゆがり
畜生のくせに新婚さんに媚ひ
餌のない客と知ってるふりむかず

さくら丸

老船で噸數も千噸という小さい船、旅行社やホテルでも骨折つてくれて、変更の出来ない別府航路を気がついてはいたが、乗り込んで見ると、これはこれは如何なこと、「二人道中由縁佛」最後のコースとしては、願ってもないあ

つらえ向きの、決して偶然とは考えられぬ、何としても不可思議に思えたらぬ

思い起こせば十年近く前の夏、川柳雑誌社主唱で徳島の阿波踊りを見物に柳友と共に路郎先生のお伴をしたことがある。ゲストとして当時私達夫妻が日本画の御指導を頂いていた木村杏園先生も御参加、終始船内や徳島で写生等を楽しんだ記憶がある。その往復の船が実にこのさくら丸であったのである。その日の天候が折悪く荒れ模様であったが、路郎先生も杏園先生も頗るお元気で私共を相手にビールを召し上がりながら大変御愉快そうであった。だんだん船は上下左右の揺れかたがひどくなつてきてテーブルをつかまえてやつと身を支える程になった。折しも一瞬どうしたはずみか、あつという声と同時に杏園先生は椅子に腰かけたまま遙るか窓ぎわまでするすと上つて転倒された。驚いた私共もよろめきながら、先生に近づくと先生は何のこともなかったような顔でさつと立ち上がった。而も

右手には今まで飲んでいたビール瓶を高くさげていられる。その不敵さというか、負け嫌いな魂というか今でもはつきり臉に焼きつけられている。その食堂が今日私達の特等食堂である。私は夕食にビールを味わいながら、亡き杏園先生の追憶を小石と語り今更のように慈愛に満ちた先生の温顔を偲び奉ったことである。今宵は波おだやかに動揺もなく、遠くエンジン音の音が静かに流れてくるのも一入胸迫るものがあり、どこかで亡き先生のお声が聞えてくるような錯覚まで起る。くりかえして言うがこのさくら丸が「二人道中由縁佛」の最後の役割を果たしてくれたことは決して偶然とは思えない有り難いことである。

十日に亘る「二人道中」が無事大阪の築港棧橋に着いたのは正午過ぎであった。出迎えの孫二人を抱きかかえて乗り込んだ自動車の中では留守中のお話やら、お土産の催促やら、現実のじいさん、ばあさんにたちかえり、又明日からの職場が待っている。

目に見えぬゆかりで結ぶさくら丸

このキャビン師の佛の大笑し

大阪が近い船路の旅疲れ
孫だきあげて老夫婦旅終る

エピローグ

台風の影響されて、繰弄された

飛行機ではじまり、波静かな瀬戸内海の陽光に迎えられてこの道中旅日記は終る。

十日間の旅といえは私のような職業にとつては大旅行である。いろいろ教えられるところがあつたのは去年の歐洲旅行にも劣らぬものがあつた。旅に異色をつけたという野心で、少々重荷ではあつたが録音器を肩にさけて出掛けた。その地その地で、あの女中、あの運転手あの友人等と言葉の写真やテープに収めて帰ってきたが、普通の写真や8ミリ等の遠く及ばぬ面白い収獲が予期以上にあつたのは倅であつた。

よかったねつかれたねと老夫婦 (おわり)

現代柳人録

- (一) 姓名(二) 雅号(三) 別号
- (四) 現住所(五) 生年月日
- (六) 出生地(七) 職業(八)
- 電話(九) 自信の句一句(一〇)
- 川柳以外の趣味(一一) 配偶者の有無(一二) 川柳に手を染めた月日

- (172) 本儀親生
 - (一) 本儀良雄(二) 本儀親生
 - (三) (四) 京都市北区小山東大野町七一(五) 明治42年11月6日(六) 新潟県高田市(七) 会社員(八) (四五) 七四二〇
 - (九) うったえて来るものほのかなるにおい(一〇) 碁、うたい
 - (一一) 有(一二) 昭和二十五年

- (173) 志水点滴
 - (一) 志水美徳(二) 点滴
 - (三) (四) 室蘭市母恋南町一七
 - (五) 明治35年9月29日(六) 大阪市北区天満(七) 商業(八)
 - (九) ニコヨンが歩く雨の日酒気もなし(一〇) 短歌と俳句
 - (一一) 有(一二) 昭和三十五年一月

- (174) 安岡 珊枝郎
 - (一) 安岡三四郎(二) 珊枝郎
 - (三) (四) 大阪府箕面市桜井四三六の七(五) 明治18年2月1日(六) 高知県幡多郡大方町(七) 医師(八) 〇七二八・五二八〇
 - (九) (一〇) なんでも(一一) 有(一二) 昭和二十七年頃

- (175) 守屋 宝山
 - (一) 守屋邦義(二) 宝山
 - (三) (四) 大阪府高槻市古曾部一四五(六) 〇三三三 大正9年1月30日(七) 岡山県味野町人現在児島市(八) 会社員(九)
 - (九) 栓抜きを帯から出して噓に馴れ(一〇) 写真(一一) 有(一二) 昭和二十一年五月頃

- (一) 守屋邦義(二) 宝山
- (三) (四) 大阪府高槻市古曾部一四五(六) 〇三三三 大正9年1月30日(七) 岡山県味野町人現在児島市(八) 会社員(九)
- (九) 栓抜きを帯から出して噓に馴れ(一〇) 写真(一一) 有(一二) 昭和二十一年五月頃

「犯人はあ奴だ」

ストリーと川柳



土井文蝶

昼下がりの住宅街とはいうもの此所は大阪でも南に当たる、工場地帯の中にある棟割り長家で、朝のうちは、お内儀さん連中が自分の家の前で洗たくしたり、世間話に花を咲かせるのであるが、

井戸端会議昨日の話むし返えし

午後になるとめいめい家の中に引込んで、あとは、ちいさい子供らが遊んでいる。一見平凡な裏長家過ぎない。その中の一軒Aの家へ一人の男が這入って来た。もう三十をすこし過ぎた、やせ型でジャンパーに茶色のズボンという、普通どこでも見かける服装で工員風のものやらかな言葉使いが、案外人を信用させるのであった。

「今日は、今日は、」
Aの妻の千子が顔を出して
「何かご用だったか」

「これからが仕事と舌の廻る(こと)」

まれ
千子「はあ全部はありませんが、いま手元に七千円ほどありますから、それだけでよかったです」

朝明「エエ結構です結構です、それだけあれば、もう一人へ渡せますから、お願いいたします」

千子「ではどうぞ」

何んの疑いも持たなかった、というのは封筒がうす手で、中の玩具の一万円札の印刷が、鮮明なので封筒の外からは本物そっくりに映ったからだ。現金を受取る

現ナマの外は用事のない男

朝明「ではこれをもう一人に渡して来ますから、この封筒は預かっておいて下さい。すぐ戻って来ますが、念のため私の住所と名前を書いておきます」

欺まされたと知らぬ仏の哀れなり

これですっかり信用してしまつて、預かった封筒を調べず、七千円渡して男の帰ってくるのを待っていたが、ついに帰って来なかった。不安がさつと襲ってきた。もう何時間か経っていた。早ようあの男が帰って来たら立替えた七千円と息子の分け前とを貰えるのにと焦々しながら、女の浅はかさをむき出しに、こんなことを夫に言うてよいものか、など迷っているうちに、もう夕方近くになって

こんな、そんな気持ちで自然表情に出ていたのか、
A「お前今日はそわそわ落ちつかんやないか、どうかしたんか」
千子はもうだまってはいられなくなった。

千子「あのお」

今日の出来事を全部話して例の封筒を夫の前へ差し出した。

A「ふうん息子の万平に分ける金やて、その男今まで帰って来んとこ見たら一寸おかしいのと違うか封筒一べん調べて見たらどうや」

千子「そんな勝手に調べたりしたらあかんと違うか」

とまだ詐欺にかかったとも知らず人間の善さを露呈していた。

A「そうかて、もう何時や思うてんねん、中調べて見いな」

そう言われて見れば、それに違いはなかった。初めて詐欺にかかったと、知った時には一べんに肩の力が抜けて、血の気がさつと引いたのを自分ではっきり意識した。

こんなちいさいな世帯から根こそぎ七千円を持って行かれたのはこたえた。おのれと思つても後のまつりだった。とにかく警察に届けることにした。

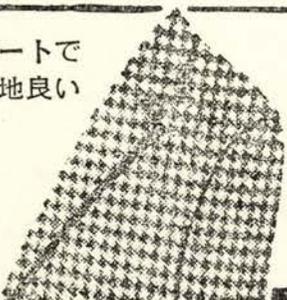
近所の交番へ行くど印を持って本署へ行ってくれに少々うんざりした。被害者もずいぶん手数のかかるものだと思つた。本署へ行く足取りも重かった。ドアを押して受付けへ申し出ると交番から電話で連絡があったのか、刑事室へ案

内してくれた。調べに当たった刑事さんは、やさしい良い人だった。事の次第を聞き取って調書にした。印を押して警察を出た時には八時を過ぎていた。家では妻の帰り母の帰りを、それぞれの想いで待っていた。夫からはお前が馬鹿だからそんなものに引掛るんだと叱られた。もつともだとも思つた。息子の分け前というちいさな慾のため夫の働いた金を縁もゆかりもない男に欺り取られたのは不覚だった。悔いる心で一ぱいだつた。想えば永い社会経験だったが、悪い奴には勝てなかった。(未完)

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

スマートで
着心地良い





扇屋花扇

富士野鞍馬

江戸新吉原、江戸町一丁目
に、明和の頃から、扇屋宇右
衛門という大見世があった。

その抱えに、天明の頃花扇と
いう上妓が居た。花扇は、源
東江に書道を学び、自筆の額
を三囲神社へ奉納などして、
そのころ有名であった。

扇屋の要東江流を書き

(タル二五)
三步金東江流の扇なり

と川柳もその書家花扇を讃え
ている。「三步」は吉原最上
妓の揚代である。「要」はカ
ナメと読む。

扇屋へ行くので唐詩選習ひ

(タル二〇)

書道の外、漢学、歌、茶、
琴、香などにも堪能だったの
で、客の方も、それに対応す
るだけの学問もおかねば
ならなかった。

花やかなはず扇屋の御しよく也

(タル五一)

「お職」は女郎の筆頭で、こ
の句は「花扇」を詠み込んで
ある。

扇屋の要黒屋二つなり

(タル一〇三)

細見に見る入山形に二つ星
は最上妓の符号である。

扇屋の骨本甲を十二本

(タル一〇八)

「骨」はお職を意味し、「本
甲」は本籠甲で「十二本」は
花魁のさすカンザシの数であ
る。

江戸町に身は末広の花扇

酒



清

灘・魚崎

大塚合名会社醸

(タル二一九)

扇屋は江戸町一丁目に在つ
た。それまた、
扇屋のあたり五丁のかなめ也

(タル九六)
とも詠まれている。

この扇屋は「五明楼」とも
称し、これが娼家に楼号をつ
けたはじめといわれている。

五明楼浅黄愚案におちかねる

(タル五六)

五湖よりも五明に揃ふ柳腰

(九〇)

五明楼上愁扇の色を見ず

(三四)

などと、大見世の権威を漢文
調に詠み、花扇の全盛をもほ
のめかしている。

扇屋の店硝子の玉揃ひ

(タル二〇)

扇屋の女街箱入買ひあつめ

(二)

と詠まれてあるように、その
後も、美妓がそろっていたら
しい。「硝子」はビイドロと
読む。そのころ美人のことを
ビイドロといったのであ
る。

この扇屋も、弘化の頃に
亡びたらしく、花扇も何代か
あって、文化八年以後には消
えている。しかし有名であつ
たのは、初代天明の花扇であ
る。当時扇屋では、滝川と二
人が鳴らしたのであるが、滝

川を詠んだ川柳は見当らな
い。

花扇が心中を企てて未遂で
あったという記録がある。

「天明紀聞」に、

「天明五年八月半ばころ、水田馬

寒中御見舞

土井文蝶

大阪市西成区松通り
九ノ二二

場安部式部(七百石)是も吉原
扇屋内花扇と情死之約束被致、
同人を刺殺し自分も自害せし
に、兩人共に仕損じ存命に付、
家来働き者にて、双方内済の熱
談に致し候由にて、大出来せし
との取沙汰なり。」
と書かれてある。天明六年、
雨譚の作。

新造を八人連て茶屋へ出る

(管四)

これも扇屋花扇を詠んだもの
といわれている。花扇の道中
に八人もの新造をつけたのは、
扇屋主人が宣伝効果のため
の策であった。

金泥集

選 乃 菫 生 麻

「器用」

年中手製器用な母を恨むなり 大きさ子 器用だとおだてにのった障子張り 勝 子 そもそのスリの初めは器用から 徳 子

病み細り鶴折るだけの器用なり 同 人形が上手でバザーで非売品 同 不器用者だが誠実を世に買われ 周 甫

おぼあちゃん器用な孫へ眼を細め 阿 茶 前衛画器用とも不器用とも見え 同 器用をを買われ一寸来て一寸来い 美 代

器用さが天狗になって行きつまり 同 器用さはないが根氣を買うてくれ あいき ぬれつばめ器用に袖の下をぬけ 葎 乃

種あかされても器用に真似出来ず 一 栄 器用さが一つの仕事に落ち付けず 同

日曜大工ババは器用とおだてられ 同 お人よし器用々々とおだてられ 清 子

次回題「女手」〆切二月末日



生々庵副主幹から不朽洞賞杯を受ける圭井堂氏

37年度 不朽洞賞の栄冠

— 吉田圭井堂氏が獲得 —

この句は路郎主幹が推された。三月と七月に不朽洞賞をにぎった圭井堂氏は、もう自他ともに37年度は獲得した感があった。

句会へ出席しても、出席トップグループには圭井堂氏の姿がいつも見られるほどの熱心な人でもある。

大東金属工業の社長さんだが、そういったイカメシさがすこしもなく、だれにも好かれる好紳士である。

釣りはプロ級らしいが、川柳でも不朽洞賞という大物を釣りあげた手腕は、三十数年のキャリアがモノをいったものであろう。

氏の友人である横川僊二氏に誘われて川柳を勉強されたそうだが、奇しくも横川氏はボクの友人でもあったのだ。

氏が十年間ほどの空白があった、再出発されたのは、生々庵氏

や好郎氏らによって川雑派寺支部を結成されたとき、そのピラを浜寺駅で見て、急に川柳熱が再燃したそうである。それまでは「深堂」を名乗っていたが、再出発に際し「圭井堂」と改号されたのである。氏は言う「ケイイ堂」と読まずのだそう。

阿倍野支部にもほとんど毎月出席され、いつも温顔をほころばせ、実に楽しそうに作句されている。氏は本社の句会でもそうであるが、すわる場所は会場の右側がお好きとみえ、氏に用のあるときは、右側の前のほうを探がせば、スグ見つかるという便利な場合もある。

氏は人格者であるとともに非常に人情家であることをボクが身をもって感じたことがある。氏の榮譽を心からお祝いたい。

(不二田一三夫)

金泥集の

スペース

先日、山川阿茶さんにお会いしたとき、「金泥集のスペースがだんだんやせてくるが、もうすこし派手にしてほしい」という申し入れがありました。

「金泥集のスペースを肥やすも細らすも友の会皆様のお心まかせですヨ」

全員が句を寄せられたら一ページ全部埋まってしまうかも知れませんが、今年など僅か十一人の投句より少ないのです。

女流作家の原稿もすくないようです。男性に書けないモノがあるはず。このページをにぎやかに飾るため、あなたの句と文をドシドシお寄せください。

「みなさんも忙しいのですよ」阿茶さんは同情的ですが、雑詠にも女流作家の句がすくないようです。いずれ友の会の新春句会で、葎乃女史からならんらかの激励があると思いますが、これを機会に友の会皆さんの奮起を望みたいものです。



モーニング

中島生々庵選

借金も受つぐ長男のモーニング
 モーニングサイズが合つて又借られ
 バンザイの音頭をモーニングに頼のみ
 モーニングおつちよこちよに見る光顔
 高砂をうつむいて聞くモーニング
 モーニング着ても屋台を覗く癖
 焼き増しを追加する兄のモーニング
 モーニング脱いでひとまじり仲人さん
 モーニング喪章も数珠もつけて借り
 モーニングサンドライツチマンかと思ひ
 モーニング紅一点の裾模様
 モーニング酔つた姿も年始め
 モーニング着たらやつぱりお家柄
 モーニングぬいでふたりの顔になり
 手袋もくつも借りてくモーニング
 意識してそり身に歩くモーニング
 虫干へ母はモーニングを撫でる
 モーニング息子に譲つて退職し
 モーニング借りたしわまで着る
 あの頃の夢なつかしいモーニング

花乃子 同 秋月 石峰 涼人 孝正 八九寸 旋風 静水 八郎 専翁 松太郎 野達路 庸佑 圭井堂 和三四郎 千翁 紀太呂 檀雄 代仕男

—

路

集

モーニング借りて葬儀の間に合わせ
 モーニングシャベルをとつて地鎮祭
 モーニング米と交換それつきり
 樟脳をたらぶり吸つてモーニング
 黒田節見事に踊るモーニング
 借りたのを忘れモーニング酔いつぶれ
 モーニング着てもかくぬ太い指
 モーニングがなし記憶だけ残り
 モーニング忙がしがる程えらくなり
 モーニング夏物も要る椅子につき
 わが子ながらモーニングよく似合い
 モーニング夏物も要る椅子につき
 モーニング一番下の箱にあり
 しみ抜きをしてから返すモーニング
 兄貴風吹かせて借りたモーニング
 モーニングさげて危篤へかけつける
 お茶席へ座らされてるモーニング
 モーニング煙草を入れることがなし
 飼犬が怪訝な目で見るとモーニング
 モーニング感きわまつた顔ばかり

灯竿 十九平 晃男 光郎 雄々 同 一鶴 淀月 嘉一郎 愛鳩 宗義 惠二朗 旭峯 弘朗 古心 孝風 暁明 藤波 千翁 博友

神前

小西無鬼選

大吉が出て神前で又拝み
 神前にカバン預けて子の野球
 神前で最敬礼をした昔
 若い妓を連れて神前憚らず
 飯台へ明日の玉串予習する
 神前でガイドも鹿も入れて撮り
 神前は素通りにしてみくし引く
 神前の人出賽銭箱見え
 神前の神楽手踊り天理教
 神前に立てば日露の絵馬が見え
 神前へ行けず吉兆だけ出る
 神前に寄進の並ぶ御芳名
 神前で聞けば祝詞も有難し
 神前をそり身で過ぎる外国語
 神前で誓い熱海で又誓い
 ドイなこと言うが神前で手を合わせ
 神前で千四札をひっこめる
 神前に母は寒さを感じない
 神前の盃二人共真面目
 靖国でつい念仏が出た老婆
 神前でみこを美人とふと思ひ

博友 暁明 石峰 孝正 八九寸 桂仙 旋風 静水 秋月 祥月 秋翁 専翁 蛙水 与太郎 和三四郎 宗太郎 庸佑 野達路 可任 隆文 涼人 保夫

モーニングきたない札を出して降り
 顔もまた借りたようなりモーニング
 モーニング親しみのない僕にする
 モーニング借着と知らず借りに来る
 人 与太郎
 地 和三四郎
 天 十九平
 素身郎 蛙水 圭水

品質優良
洗ペンカチ
 TACHIKAWA PEN
 大坂市東区船場町一丁目十一番地
 立川ペン先株式会社
 タチカワペン
 タチカワゼム
 タチカワ面紙

神前へすでに岩田と神は知り
 神前を出ると斗争心が湧き
 神前へ養ひつて行く離れ場
 神前で子供のシッコにママあわて
 神前で契う借老利那撮り
 神前の二人の拍手びたり合
 賽銭は十円大きい願事
 神前へうそは申さぬ顔で来る
 神様に吹き出されそ願をかけ
 神前のお神楽うれし雨降らせ
 神前でお払い受けて洋行し
 神前に別れを惜しむダムの村
 神前をアベック意識して通り
 神前に手許震えた式が済み
 神前へ来てアベックの腕を解き
 神前の明け喜れ祖母にあるらし
 神前は人の見ているお賽銭
 神前がさみしい雨の七五三
 アベックで来ておみくじの音をたて

一鶴 淀月 旬菜坊 嘉一郎 繁太郎 どんたく 光郎 圭水 ひ呂し 勝子 晃男 勝亭 紀太郎 檀雄 代仕男 千翁 木魚 愛鳩 むじな

一べんに頼まれ神様もうろたえる
 神前を飾り合つて七五三
 神前の木におみくじの花が咲き
 神前の灯に白々と鏡餅
 賽銭が樽を外れるさき気嫌
 神前へくじ取る雀にやしなわれ
 新米を供え感謝の祈りする
 神前の鳩は不況を知らず舞い
 十代の恋神前をはばからず
 佳 素身郎

神前で売るお守りの大中小
 神前も時代の流れストのピラ
 宮詣りてつかい夢を抱いて来る
 神前を貸して苦しい台所
 賽銭をはずみおみくじ子に引かせ
 神前で宮司が稼ぐ大安日
 神前で痺れた足をもて余し
 神前で二度も晴着を着てしま

小銭ないかと賽銭箱の前で聞き
 地 弘朗
 神前に股火鉢してお札売り
 天 光道
 靖国の神前陛下の背がまるい
 惠二朗

のんびりと丹前朝から飲みつづ
 のんびりの彼も不渡りにはあて
 のんびりの父さん短気のお母さん
 のんびりとする新年をはせまわり
 里帰りのんびりようぜす叱られる
 連休をのんびり寝てる無一文
 孝正

藤井明朗選

のんびりしているようでつがなし
 のんびりな田舎あきれたご挨拶
 ジェット機のを追うる懐ろ手
 のんびりとして案外貯めて居り
 のんびりとした性質をもてあま
 のんびりと暮らしたしむせ十二
 打算はあつてのんびり見せて置
 のんびりした長男に気が疲れ
 繁雑を避けて和尚へ暮をいど
 のんびりとして小金貯めて居る
 のんびりも出来ず手形が追いま
 妻の目がのんびりすぎるうちの人
 満腹の牛のんびりと草に伏せ
 のんびりと吐いてたばこある打
 のんびりと見えて決め手はぐし
 のんびりる出来るところか妻の留
 のんびりとして取る物はきつと
 のんびりと見えて商物を見逃さ
 のんびりと見せて胸算用はあり
 雨の音のんびり暮す日曜日
 上の子ののんびり末の子にや
 のんびりとおられぬ二階の一
 のんびりとしていて席はちゃん
 のんびりとほしていらせんな娘
 のんびりして居る管有力なヒキ
 のなびりと今朝も落葉で芋を
 仕事の鬼も日曜子供と糸を垂
 母の誕生日やつぱりのんびり
 のんびりとできぬ世間に誰が
 のんびりと朝寝を楽しむ日曜
 のなびりと寝とれと課長に見
 帰郷してのんびり雪に閉じめ
 金詰りとは見えぬのんびり
 時差出勤ののんびり妻も朝寝
 にせ札の記事ののんびりと読
 暮し

判志
 代仕男
 圭井堂
 たけお
 雪美
 どんたく
 むじな
 雄々
 嘉一郎
 祥月
 雄水
 可住
 代仕男
 晃男
 千翁
 蛙水
 秋月
 勝月
 野迷路
 野明
 蛙水
 綾美
 藤波
 弘朗
 八郎
 素身郎
 句菜坊
 旋風
 光一
 圭水
 博友
 宗義
 花乃子
 紀太郎
 与太郎
 隆文

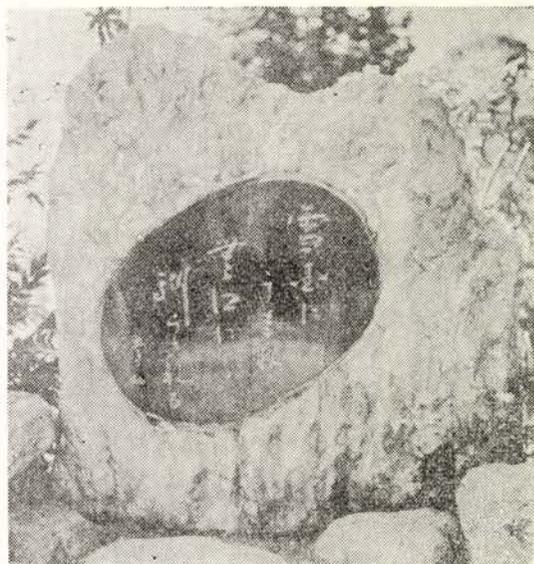
のんびりと出来ぬ定年平社員
 のんびりとした顔もおり十二月
 パス代を聞いてから出す紐財布
 のんびりと暮を見て居る置炬燵
 ふるさとはいいな牛車に乗
 のんびりと暮して末は養老院
 のんびりと永年勤続無精ヒゲ
 耕転機みてのんびりと歩む牛
 のんびりとできぬ気性も親づり
 定年は今日ものんびり庭を掃
 選挙でもなげれば誰れも来
 のんびりと見える消防署の望
 のんびりとした生活をせす
 見物へ猿のんびりと蚤をとり
 公休日守衛のんびりと股火鉢
 のなびりと寝とれと師走の療
 のなびりと末っ子のぬきに浪
 諸事のと女に手が早い
 遅れたら行かぬ気ののなび
 のなびりと暮らす恩給夫婦
 温泉の朝ののなびりと妻が
 驚と琴の初音を耳に寝る
 のなびりとして裕福な一人
 のなびりと雨へ土方の将棋盤
 両方がのなびり三年越の恋
 のなびりとした日が続く里
 のなびりとご隠居株で儲け
 佳

石太朗
 石峰
 八九寸
 和三四郎
 涼人
 石峰
 光道
 雄々
 晃康
 久亭
 弘朗
 清人
 藤波
 十九平
 ひ呂し
 紀太郎
 不醉
 愛鳩
 静水
 孝風
 宗太郎
 専翁
 保夫
 桂仙
 十九平
 愛鳩
 檜雄

のんびりとはしゃぐ一泊婦人会
 貧乏はしてものんびり子を
 のなびりと見られなくやしき
 発車ベルののなびりして居
 小春日へくわえ煙草の看板
 のなびりとして居た明治な
 停年を機会にのなびり旅に
 五

暁明
 惠二朗
 孝正
 檜雄
 秋月
 木魚
 素身郎
 八九寸

色紙短冊
 書画用品
 大坂戎道
 丹波堂
 中野セメント



川柳宮城野社(仙台)の浜夢助元主幹の句碑
「雪国にうまれ無口に馴らされる」が仙台市西
公園に建立、十二月九日除幕式が挙行された。

柳界展望

句会

▼本社二月句会は七日(木)午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。寒

さためげず柳友お誘い合わせの上多数のご出席をお願いする。▼南区医師会文化部杏林川柳句会(大阪市)は一月二十一日(火)午後七時半から三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼コッコ川柳会(大阪市)は一月十一日(金)午後五時半から料亭津むらで新年宴を開催。新春句会は二十五日(金)午後五時半からコッコ株式会社会議室で開催。▼南海電鉄川柳句会(大阪市)は一月十七日(木)午後六時から難波親和

クラブで開催。▼大阪通信病院新春句会は一月二十六日(土)午後二時から五階会議室で開催。上路郎主幹出席。▼川雉岡山支那新春句会は一月二十二日(土)浜田久米雄居で開催。▼川雉下関支那新年よせ編句会は昭和三十七年十二月十七日国弘半休居で開催。▼川雉備前支部新春句会は一月十九日横山一声居で開催。▼明和川柳研究会(西宮市)甲南川柳教室(神戸市)合同の忘年句会は十二月十六日(日)能勢沙の湯温泉へバス吟行を開催。▼第八回かほる会、川柳と俳句の集いは十二月十六日(日)吉永洗雨居で開催。又、第九回のかほる会は十一月二十日(日)正午から新年吟行七福神詣の後、向島「雲水」で句会開催。▼大鉄川柳三十周年記念句会は昭和三十三年二月三日(日)午前十時から京都市下京区河原町正

面杖殿(東本願寺別邸)で開催、兼題、帯・名門・輪・苔・善人・続く、(投句は一月十五日までの由)出句は二句以内当日〆切十二時。▼青森県川柳社新年句会は一月十三日午後一時から青森市安方町秋田屋旅館で開催。青森川柳社では故小林浪人句集刊行を企画四月中旬を目途に鋭意編集中の由。▼平安川柳社(京都市)本社二月句会(一日)夕六時から寺町仏光寺上ル東側透支寺で開催。▼川柳しなの社(松本市)二月例会は十六日(土)午後七時から石曾根民郎居で開催。▼三重川柳会(津市)二月句会は十日(日)午後六時から中央公民館で開催。▼飯坂町文化祭川柳大会(福島県)は昭和三十七年十一月十八日飯坂町中央公民館で開催。▼川柳きやり吟社(東京都)の二月例会は一日夕五時半から千代田区神田東紺屋町、寔撰寺東京別院で開催、宿題各三題。「交通」茶六選、「少年」五柳選、「二月行事」周魚選。▼函館川柳社新年初句会は一月十三日(日)午後六時から千歳町千歳会館で開催。▼小樽川柳社一月句会は十四日(月)午後五時から水天クラブで開催。▼名古屋川柳社新春句会は一月初八日午後五時半桜天神社社務所で開催。▼川柳噴煙吟社(熊本市)二月例会は十一日(月)午後六時半熊本市大江町交通局クラブで開催。▼時の川柳同好会(神戸市)二月句会の中川伽藍洞・阪本英峰還暦を祝う句会を併せ二日午後五時

半から祇園神社で開催。▼観光川柳(東京都)二月句会は十日(日)午後一時から伊藤路天居で開催。▼盛岡川柳会(盛岡市)例会は毎月第二金曜日午後六時—九時まで盛岡市駅前盛鉄クラブで開催。宿題三句、二月「吹雪」猛者郎選。三月「反省」北河選。

消息

▼若本多久志氏(西宮市)は一月三日鳥も通わぬ八丈ヶ島へ伊丹から二時間で飛行、浪と風の音を聞きながら温泉で旅の気分を味わわれた。「正月を流人の島に涙する」▼河野春三氏(大阪市)は一月二日から山陰の旅に出、玉造、皆生、三朝の各温泉で清遊された。十三日には不朽洞へ来訪、路郎主幹と半日談話された。▼楳元紋太氏(西宮市)は退院後、休診日以外は連日通院既に百日になられる由柳界のために、一日も早く快癒されるようお祈り申上げ。▼不二田一三夫氏(大阪市)はNHKの万才脚本依頼に執筆、二本ながらパス、秋田実氏から「空中団地」は激賞を得られた由。▼若本多久志氏(西宮市)は去年の十一月タクシー関係の四会社共役員を辞任され、老後にふさわしい新事業を企画しておられる。そして一月十四日から十九日まで更生年病院四階五四号室の人間ドックに入院された。▼八木隆天郎氏(堺市)は十二月二十日富田林市PL会場に於いて開催の富田林ロータリークラブ十二月会合に招かれ、「川柳から見た世相」と題して講演をされた。又、志修吟詠同好会の十周年祝賀吟詩大会で初代会会だったのを記念して記念品を贈与せられた。同吟詩会は、路郎主幹夫妻出席の下に開かれた堺市立水族館開館記念川柳大会の余興のため結成されて以来発展してきたものである。▼川柳「ひろしま」の主幹森脇幽香里女史が胃腸病静養のためお子様といられるロスアンジェルズへ旅立られたらで、同誌は熊谷蓮生氏が代って選句等に当られることとなった。一層の発展を祈る。▼福田丁路氏(高槻市)は昨年十二月大阪府立茨木高等学校に転任された。▼河相すゝ氏(西宮市)は一月二十一日、山陰線の香住へ旅と句の会の一行三十三名と清遊され、折からの積雪でなかなかの旅気を味わわれた由、先ず大乗寺(一名応挙寺)の蟹ガス場を見学、朝からは夜明の漁港の魚せりを見て宿に帰って朝食したため、午後城崎温泉に寄って帰えるとのこと。「応挙より蟹に魅かれて来た香住」の句を寄せられた。▼樋高薫風子氏(大阪市)は一月十三日から三日間家族連れで金沢湯涌温泉に遊ばれた。大人は大人の、子供は子供の心で深い雪を嬉しがったと寄信された。兼六公園で「氷柱さえ夕顔芋の水柱なり」▼川岡豊眼子氏(諫早市)は長崎時事に「思出の人々」と題して随筆を連載、芸能界の松井須磨子、阪東妻三郎その他の有名人の往年を書かれた。又、第十七回の「時事新春文芸」川柳部門で天位を獲得、二年連続

第四百十三回

大萬川柳

「女性」

入選発表

麻生路郎先生選
投句総数五六三句
入選 四十九句

すばらしい女性に目まい起しそう

宮崎 卯之助

モナリザもひきあいに出ず女性親

熊本 茂 男

家付きの医師の指揮下にある夫

京都 八九寸

女性の性はどこかおいて来てる女医

岡山 七面山

祖母母妻女性三人にかこまれて

大阪 あいき

易に凶と出て玉の輿乗りそこね

石川 光 郎

憲法に目覚めて女性縁遠し

西宮 多久志

食いものにされてもおんなしがみつ

貝塚 一 鶴

土佐犬のような女史だが爪をそめ

大阪 晃

母の言う女性そこらに見当らず

笠岡 忠 三

によしようとも説めば小便臭くなし

芦屋 一 十

あなどった女性に保険はいらされ

神戸 静 馬

一女二女三女やっぱり養子すじ

堺 圭井堂

女性だとかしこでわかる手紙が来

岡山 十九平

手心を加えて女性にさからわす

岡山 藤 波

割勘に女性ひとりが見逃がされ

大阪 一三夫

こんなこと女性に言える俺れも齢

大阪 清 人

かんざしが揺れて女へ初春が明け

岸和田 きさ子

かかるとき女性は抱く胸を持ち

西宮 牧 人

ツイストの名手と見えす高島田

見島 恵二朗

女とは哀しお通夜も酌きまわり

大阪 柳 志

女性用バックを提げて社長待ち

石川 宗太郎

鉢巻でかかれと女史にはげまされ

愛媛 暁 明

女性など眼中にないところがもて

女性には歯の浮くような世辞をのべ

女性には好かれるための努力をし

米子 雄 々

ビフテキをこまかく切るも女性なり

オラだって女性の一人ヨイトマケ

倉敷 方 大

コンパクト女性の作戦練るところ

ひからびた女性同志で口達者

女性には違いはないがおばあちゃん

アメリカで和服着ているだけでもて

助太刀をする母親としてまだ死ねず

陰に女性ありと刑事につけられる

同じ会費払うて女茶をくばり

卑下ばかりしててうぬぼれ持つ女

同権の女性にむかしから敷かれ

ビヤホールどやどやどやと女性群

女性ファン甘きに蟻のたかる如

喪服着てお女将女性の顔でくる

論告は終始女性に味方せり

女性だからよいもの膝坊主

女性としての自覚おてんばとも別れ

紅一点味の素にも相似たり

男への距離にスピッツ抱く女性

女性には幼稚園からいけずされ

西成で女けもののように生き

五 客

大阪 梅 里

大阪 野迷路

大阪 文 秋

静 波

光 道

静 馬

静 馬

静 馬

静 馬

静 馬

静 馬

静 馬

静 馬

静 馬

静 馬

地ノ句

二十貫十一貫の妓に振られ

女性には声の調子もつい変わり

天ノ句

大阪 福 郎

第11回大萬川柳大会

3月10日(日)午後一時

会場 大萬階上

阿倍野区松崎町3の10

ご注意

三月兼題「一と旗」にかぎり

3月5日切厳守

第11回大萬川柳大会
3月10日(日)午後一時
会場 大萬階上
阿倍野区松崎町3の10
ご注意
三月兼題「一と旗」にかぎり
3月5日切厳守

- 二四 小松園 二、〇 大阪
 - 二五 多久志 二、〇 西宮
 - 二六 恒明 一、〇 大阪
 - 二七 宗太郎 一、〇 石川
 - 二八 一三夫 九、五 大阪
 - 二九 忠三 九、〇 笠岡
 - 三〇 知恵美 八、五 岡山
- 次の題「多数決」五句以内
(昭和三十七年度最終課題)

発表 二月二十日
発表 二月二十日
三月の予告(38年度第一回)
「一と旗」

投句先 大阪市阿倍野区松崎町三
発表 三月十日
発表 三月十日
ノ一〇 大万川柳会



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 一月句会 (大阪市)

1月7日 午後1時
会場 千日前自安寺

輝やかなしい六三年のスタートを切る新春句会である。暖房完備の会場は小春日和をおもわすあたたかさで作句のコンディションも上々だ。

「おめでとうございます」
「本年もどうぞよろしく」

正月風景もなごやかである。

路郎、腹乃両先生もますますお元気で会場は活気にあふれていた。主幹久しぶりの柳話は、昨年一月は歌会始めの盗作によって明けたことを遺憾とされ、作家側の文学態度へ、するどいムチをふりあげ、真剣なる創作意欲を要望された。

川柳世相展へ主幹が執筆されたのを、柳都誌がそれをとり上げ、主幹にも申さん々と一筆つつけたことに對し、主幹は十二月号をもう一度読み直せと、なみなみならぬファイトをもって、説話されたことは、主幹のご健康をもの語るものである。

三十七年度の不朽洞賞カップは吉田圭井堂氏の永久保持ときました。

全出席者は九年連続の傍島静馬氏をはじめ別掲の十二氏であるが、山田季費氏の前半は広島からの出席であった。副主幹中島生々庵氏もみずからその範を示めされたのは、われわれに無言の激励とかけともよかろう。

六三年へき頭の不朽洞賞杯は石倉旅風氏が獲得された。

即年にちなんで飛躍の年である。川柳またしかりである。(F)

出席者——路郎、八郎、文蝶、進之助、万葉、庸佑、薰風子、玲人、すむ、白柳、柳志、竹莊、一三夫、判志、一瓢、摩太郎、水京、一舟、メ女、水客、白溪子、客遊子、古方、行人、元照、秀子、数子、市郎、武雄、太路、六童子、いわを、季費、専翁、奈良子、舟遊、みさ子、あいき、狂二、南宗、圭井堂、静馬、榮、小松園、生薑、恒明、多久志、生々庵、柳宏子、愛論、三更、いさむ、榮香、与呂志、文秋、梅里、阿茶、静幸、宏子、腹乃

兼題「人づくり」 中島生々庵選

年頭の辞抱負の中の人づくり 六童子
人形ほど業には出来ぬ人づくり 庸佑
火の粉が降ってきてから人づくり 阿茶
倍增の次の抱負は人づくり 進之助
ドラムならでは生きられぬ世に人づくり 文秋
人づくりわかちやいのけど子沢山 静馬
人づくり尻目にパチンコ屋がはやり 白溪子
人づくり嫁と姑で食い違い 柳志
人づくり矢つ張り金のいる話 榮
人づくり百年河清待つごとし 文蝶
倍増がすんで今度は人づくり 白溪子
他人事のように聞いている人づくり 柳宏子

人づくり出来そこないも大手振り 静幸
民族の血を呼びもどす人づくり 一三夫
文相がちもてあます人づくり 狂二
先生がストをする世の人づくり 失名
アメさんにきて日本の人づくり 静馬
人づくり牛の歩みも教えられ 多久志
人づくり金の卵になれと言う 牧人
人づくり十八年目は人づくり 野迷路
人づくり尾を振る犬に育てる気 光道
人づくりせせら笑ってロケティン 八九寸
無責任時代が過ぎた人づくり 多久志
人づくり神代も同じことをいい 太路
イメージは明治にあった人づくり 同

人づくり大和魂の洗い張り 阿茶
だしぬけに何思けん人づくり 阿明
人づくりの見本のような子に育て 小松園
今まではたしとったんや人づくり 恒明
カプルは俺じや俺じやの人づくり 旅風
借金上手人づくりとは厚かまし 生々庵

人混みが迷惑そうな犬の鼻 旅風
人混みを見下ろし望楼春めける 光道
見送りの混むポケットへ捻じ込まれ 八九寸

混雑の中でうれしい手もにぎれ 宗義
福笹を肩に混雑くぐり抜け 牧人
混雑をとらるカメラも入り交り 暁明
混雑は同じ羽織に着いて行き 隆子
混雑にポデーガットが寄り添うて いさむ

酒でなく人によつて初詣で 教子
駅前の混雑テントでさばかれる 庸佑
尻を押す職混雑へアルバイト 進之助
混雑に大きく揺れる日本髪 市郎
芋洗う混雑隣り湯定休日 繁太郎
混雑の中で挨拶すれちがい 柳宏子
目印の風船混雑からにがし 舟遊

混雑は踊りのコッで切りぬける 宏子
混雑も事なく過ぎてお茶の味 六童子
混雑を物ともしない若さなり 阿茶
特売場女のひじの強いこと 市郎
混雑に神様聴いてくれたやら 圭井堂
ごった返す混雑もよし福もらい 榮

混雑にまぎれて連れをまくつもり 静馬
混雑の前へ得票書き込まれ 柳志
混雑がスリもデカも押し流し 水京
混雑の中に静かな京訛り 玲人
混雑をさけて茶の間が混雑し みさ子
混雑へ背をむけたがる年となり 阿茶
人よりは車がこわい都市の混み すむ

混雑をほやきながら採まれに出 柳宏子
仲裁のボリスへよけい混雑し 舟遊
混雑をおとそ気分テレビで見 あいき
混雑にスリも仲間を見失い 静馬
混雑へ今日書入れのモサトデカ 梅里
混雑の中で女がふと匂い 多久志
金もないのに混雑の渦に 一三夫
屋上に出て混雑の息を抜き 南宗
混雑に女の吐息の近いこと 摩太郎
人波に押されて一円踏んで過ぎ 水客

いま置いた剃刀が無い桶が無い 圭井堂
五分間の暮間トイレで足がみし 生薑
混雑にズボンがずれたまま押され 南宗
混雑でスリは仕事の顔になり 文秋
混雑の中で賽銭借りて置く 萬葉
混雑に我が空白がとけきれず 生々庵
タキシードのお蔭で汽車に乗りおくれ すむ

おふくろに服新調も書いてやり 寿美司
服新調空いているバスにも腰掛け 光道
新調は這って来る子へあとすさり 隆子
春へ家具置き換え新調キッド出す 八九寸

兼題「新調」 菊沢小松園選

兼題「混雑」 土井文蝶選

新調はうしろ姿も見てもらい 牧人
 新調の單車が雨をあるかせる 宗義
 新調の服は姿勢もあらたまり 楓林
 新調の方を伴にして行かれ 古方
 降りそうな空へ新調気が疲れ 多久志
 新調の服も破って伸び盛り 玲人
 金屏風の前で新調うつされる 竹莊
 新調の背広へ酒が遠慮せず 文鶯
 ざりざりになって新調手抜き 文鶯
 新調の靴当分は脱ぎ捨てず 天明
 近所へ来たとき新車を見せにくる 同
 新調の靴を気にして戎橋 旅風
 新調を気にして歩く齡でなし 与呂志
 新調の襪のままで病みつづけ 阿茶
 新調の靴が心ブラさせたがり 愛論
 かっこよう歩く新調骨が折れ 静馬
 へそくりは別で新調してる妻 いさむ
 新調の今日はデートの靴が鳴り 文蝶
 新調を子に着せ親は染直し 梅里
 ライバルの新調すくめに押され味 玲人
 新調の順がまだ来ぬ子沢山 静馬
 鼻声でねだった新調とはいえず 竹莊
 新調で来たのに席が空いてなし 小松園

兼題「幸福」 若本多久志選

幸福がまだつかめないかつら下 竹莊
 地下足袋の泥俵せな職があり 柳志
 日めくりの一枚ずつの幸せさ 水客
 四五円の幸福東でくる賀状 句楽坊
 俵せをどつぱり持ってハネムーン 文秋
 無理言うて見て幸福をたしかめる 竹莊
 地位と金みんなうやうや命酒 進之助
 小さな幸福十円を拾うなり 白柳
 幸福は他所を回って露地に老け 六竜子
 孫が背を流してくる湯につかり 梅里
 幸福はわたしにおまじ古と出る 萬葉
 幸福を背一ぱいにハネムーン 六竜子
 旦那かえ今幸福に居るそうなる 摩天郎
 幸不幸背中合わせの世に生きる 梅里
 幸福がいつぱいからオイあな 一三夫
 幸福は医者も薬もいらぬ妻 女
 幸福を抱いてこだまの指定席 進之助
 貧相な顔で幸福感に満ち 柳安子
 店はもう息子に委かせ茶をたてる 白柳
 足ることを知って感謝の日が続く 圭井堂
 幸福へいま一足が追い付けず 牧人
 血統書首に幸福そうなる犬 光道
 小ま切れの幸福で逢うて来る 宗義
 幸福という事にして出す便り いわを
 満足のないしあわせでふしあわせ 庸佑
 仲人のウソ笑ひ合う夫婦仲 市郎
 貸借もなく幸福な除夜の鐘 柳志
 幸福な鼓動女も目をつむり 萬葉
 俵せな膳へ数の子など要らず 柳志
 幸福な寝顔へ何か言って撫で 愛論
 握りめし母俵せを握りしめ 生々庵
 探し回った幸福がうちにあり 多久志

席題「珍客」 正本水客選

珍客のお国言葉がなつかしく 一三夫
 珍客に末っ子シゲシゲ見つめられ 与呂志
 珍客に夫婦喧嘩もしておれず 静馬
 珍客で帰る故郷に家がなく あいき
 珍客へふところいよいよよんちなり 恒明
 珍客と同じ齡なり酒はずむ 小松園
 珍客を迎える顔のけわしすぎ 柳宏子
 珍客へ地酒に添えた能登の蟹 梅里
 珍客とかつては妻を張った仲 一三夫
 生活のくるしき珍客にもわかり 舟遊
 珍客を送って皆んな飲み直し 文蝶
 いつ来ても珍客にする暮のかたき 文秋
 無遠慮のまま珍客が先に酔い 南宗
 珍客の無口頼もし三泊し 栗
 珍客やなあとあぐらで向い合い すむ
 珍客が甘党なのにチト困まり 一三夫
 珍客へ市場が遠いことを詫び 六竜子
 珍客が噂の人とあとで知れ 白溪子
 珍客のベレーを子供持ちあるき 小松園
 珍客は話すいとまもなく酌がれ すむ
 珍客は女房のお気にいらぬ人 多久志
 珍客の酒癖とんと忘れてた 恒明
 珍客の靴のよこれが眼に余り 水客

席題「景気」 吉田圭井堂選

景気はどうかあろうと初荷上景気 生々庵
 良きにつけ悪しきにつけて戎さん 市郎
 景気よい話いねむりながら聞き 女
 景気よく初日をあげる触れ太鼓 梅里
 前景気人景の程をはかれる 狂二
 ふところの景気好きへ嫁があま 白溪子
 振出しの地位から見れば上景気 生薑
 とくんで景気をおおる手を叩き 進之助
 景気かいな一円玉は落ちたまま 文蝶
 景気々々他人の花は赤く見え 文秋

拾い屋をしてても景気気にかかり 静馬
 不景気は知らぬ娘のハイヒール 市郎
 偶然に会えば景気をまくし立て いわを
 車中談又北浜をわきたたせ 進之助
 不景気のせいにしていろいろなし 文秋
 景気よう飲もやないかよとたかれる 静馬
 景気よい話にうかと乗せられる 恒明
 不景気も何処吹く風のキャデラック 梅里
 景気よい話半分ほどに聞き 舟遊
 挽回の景気へ北浜の折の音派手 六竜子
 流行の色で景気を予言され いわを
 まああとやう景気なら良い方だ 阿茶
 景気よくジャンベン抜いた新春相場 多久志
 ヨカ景気お国訛りの出る景気 栗
 不景気が子の弁当にまでひびき 水京
 景気よい話ワタシはキキ役さ 愛論
 つけ皆んな払うて景気のため寝酒 客遊子
 景気よい話しといて金借して 与呂志
 統計で教えてくれる景気なり 白柳
 景気にも触れて年頭の辞らしくなり 柳宏子
 不景気な面はするなとコッパ酒 一瓢
 お隣りは景気よいか新車入れ 行人
 景気よい初荷へ社長法被着る 太路
 不景気な顔になれない程儲け 小松園
 小商人景気の風はビりに受け 文蝶
 アメリカの景気気にしてる予算 柳志
 胃袋はお通夜の景気知っている 水客
 景気はどうでもいつものハイでよし 白柳
 大阪の景気見に来てすられてい 愛論
 不景気な話は一切せぬ勝負 阿茶
 いい景気だったと夢を追っている 恒明
 手拍子が襷を抜けてくる景気 南宗
 新聞の景気を妻が承知せず 圭井堂

席題「トッパ」 森下愛論選

五十音いづもトツプに呼出され 三 更
 どの会もトツプから出てよ喋り 水 客
 しんがりトツプの前を行くマラン 玲 人
 トツプに見えしんがりだった三周目 生々庵
 トツプ切って行くマイルに指が立ち 摩天郎
 うちの子がトツプ一周だけで済む 一 瓢
 トツプだけ必ず鐘の鳴る 仕組 圭井堂
 遊び好きトツプにおぼえるかくし芸 竹 莊
 頃を見て幹事はトツプに芸を出し たけし
 茶柱の立ったトツプの茶をよばれ 萬 楽
 何でもトツプでんねと初詣りに会い 生々庵
 頼母子をトツプでおとす気ではいり たけし
 ジャンパーで来るは同窓のトツプなり 白 柳
 赤旗でトツプを歩く程若し 文 秋
 トツプからあられてるらしい会議室 庸 佑
 トツプモードそれほどひとが見てくれず 静 馬
 顔の事言わずにトツプモード着る 客遊子
 寄附帳へトツプに書かず人をより 白溪子
 下馬評はいつもトツプでよう勝たず 庸 佑
 トツプ記事後はひっそり鶏を飼い 水 客
 トツプからキッスシーンの予告篇 愛 論
 (庸佑清記)

川 維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

ちと足らぬ方が気楽に世を渡り 文 秋
 世渡りの道人間を通りたい 専 翁
 世渡りの六三三四へ投資する 生 薑
 待ち呆けと判り底冷えこたえてき 柳宏子
 底冷えの門小走りの下駄の音 双 楽
 底冷えの知らぬ若さも白い息 喜 仙
 底冷えがする日の爛はまだぬい 市 郎
 底冷えを言うて豆炭裸にし 文 蝶
 底冷えの舗道へ屋台火をこぼし 梅 里
 終るまで待たせておけと忘れてる 柳宏子
 何もかもおしまいねえと 右 左 狂 二

川 維 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

金のありそうを顔が見えない社用族 光 女
 金よりも愛情ですわと言う若さ あいき
 信用して貸した金友と帰らず 城 東
 賞与袋どの金もみな落着かず 川柳堂
 愛情の果をお金でしめくくり 珠 笑
 バイトした金で母の日プレゼント 豊 子
 金だけが味方未亡人強く生き 水 京
 おくびにも出さぬが母は金と知り 一 舟
 追込みが追込まれてくる年の暮 らつきよ
 追込みの疲れをいやす酒をつぎ 洋 子
 追込みへ万引されぬ眼を備い 一 栄
 追込まれ殺して呉れと銃を捨て 清
 追込みにもう弁が出るじぶん 義 介
 心中へ追込んだいて悔やむ親 風仙洞
 追込みとなれば年期が物をいい 一 舟
 同情が取持つ縁で二児の母 季 生
 同情したが自分の病つい忘れ 京四郎
 その気持わかるわかるとおもいやり 天 真
 愚痴言えば同情だけはして呉れた 宇佐夫

川 維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

落はくの肩へ情の手がかかり 六 竜子
 久しぶり友を訪ねて貰い泣き 政 子
 同情で買うてやるのはたが知れ 文 秋
 同情はしても背に腹かえられず 寿美司
 同情に限界隣りよくもめる 天 樹
 同情を求め心ふり返り 白 柳

川 維 京都支部句会 (京都市)

田中烏雀報

相手にもよりけり無口とも言われ 笑 有
 強敵を相手の演説スキもなし 萩 路
 初めてのキスに相手は目をむむり 押 山
 持参金付ける相手で破談にし 弦 月
 取るに足らぬ相手で負けておとす 内 海
 ダンとベン喧嘩に不足のない相手 あき坊
 怒ってる相手笑わず術を知り カロ女
 冗談も相手の虫の居りどころ 浅 太
 まだ相手でございませんと先手打ち 須磨子
 孫相手祖父の英語はビジンなり 柳 葉
 世話人を相手に主人飲み直し 銀 水
 よい話相手となつて喜ばれ エス子
 酔って隣枕のいらぬ相手なり 一つ葉
 女給哀話相手次第で筋を変え 麗花麗
 社長への相手どの手で負けなうか 暁 舟
 宴会も相手探して席を定め 平八郎
 行過ぎた後で相手を思い出し 万里歩
 親切も相手次第というずるさ 快夢起
 いい相手出来て夜更かし又始め 紅 溪
 子とかつぐ荷物ほとんど親が持ち 細 香
 子沢山喧嘩相手は同じ奴 静 紀
 打明けて語る相手にまだ会えず 紅 茶
 古稀でまだ茶呑相手がいる元気 静 杉

- 天位受賞者
 ⑦水客⑧生々庵・阿茶⑤文秋④晃
 ③圭井堂・一瓢・雄声・柳志・白
 柳・進之助・静馬②三司・圭水・
 好郎・一三天・恒明・多久志・黙
 平・旅風①客遊子・庸佑・榮・和
 郎・梅里・正一・摩天郎・一
 十・夢虹・生薑・素人・舟遊・い
 さむ・みさ子・どんたく・奈良
 子・梅柿・専翁・季費
- 不朽洞賞杯受賞者
 ②圭井堂①圭水・一瓢・静馬・文
 秋・多久志・恒明・みさ子・雄
 声・専翁・進之助
 (水久保持・吉田圭井堂)
- 昭和三十七年度
 全出席者(敬称略)
 傍島静馬(九年间) 金井文秋(七
 年間) 西田柳宏子・河井庸佑・
 (六年间) 樋口舟遊(五年間)
 山川阿茶・橋高薰風子(四年间)
 吉田圭井堂・河相すむ・中島生
 々庵・西いわを・山田季費・

会話の二こま庶民の叫びがある
 ニトリの会話はクビをしめる順
 大犬と小犬を連れている会話
 お母ちゃんの背中にもたれお母ちゃんも会話
 天国や地獄の会話 何語やら
 トイレでの話損した話ばかり
 未来までつづく鉄路は冷えている
 人間の未来は汚れゆくばかり
 うつろな埴輪未来歌いつづける
 未来がある幸な人を笑ってやる
 菓子老舗後生大事に司の字
 菓子一つ聞分けぬ子の声を消す
 どちらも本家というまんじゅうの中味はあん
 フランスも日本も少女菓子が好き
 気まずく帰った後に菓子半分
 師匠の子先ず菓子料の字をおぼえ
 気がおぼえているらしい横顔を見せやる
 気がぬする人の前行く白い足袋
 父の気がねを知っている子等
 肩綿で補ったのはもう昔し
 撫肩の孤独が爪を噛んでいる
 哀愁をその撫肩におく別れ尚平

親生 幸男 紫蘭 烏雀 苦菜 頑一 美佐緒 豊次 枯粒 極堂 生薑 和三郎 礫 づる子 全子 静香 ゆきら 司郎 甫三 秀子 高雄 尚平

川維 出雲支部句会 (出雲市)

尼緑之助報

酒井ひか平報
 百円にくずせば羽が生えて飛び越山
 たった百円買った株値を日々のさき
 肩叩きしいちやん百をこまかした
 百までは生きやと孫に励まされ
 八重子
 百円貨また釣銭を間違われ孝風
 百年の大計たてて苗木植え梅枝
 百身は延びゆく竹の初の節枝葉
 百円か園児舌打ちして貰い弥采
 亡き母の話で暮れる百カ日凡志
 運ちやんの不機嫌時速一〇〇で去に
 百円で百万円の夢を買い信夫
 百日暖問題にせず子は遊び凡右
 百円の義金が記事の端にのり弥太郎
 今の妻お百度詣りでかなえられ
 百までも道一すじに女形多津男
 百点のそれから国語好きになり青峰
 百程の窓が団地を夜にする孝風
 百グラムの量がようよう判りかけ
 百ミリのレンズで太子追い廻し信夫
 百翁へ知事がわざわざ出むいて米
 百才を祝う養老院の隅永断
 ぼつねんとお百度石が世を見つめ
 終風

川維 篠山支部句会 (兵庫県)

酒井ひか平報



川維 備前支部句会 (岡山県)
 横山一声報
 百万も貯めてる家の間を借りる武一
 月世界の地主なるらん百年後無鬼

常識のわからぬ人に目を反らし
 百姓の常識一粒でも拾い
 常識が行けば十二月が越せず
 常識を推理小説くつがえし
 常識があつて満員車に乗れず
 常識が明治昭和と変つて来
 常識でわからん河豚のさきが好き
 常識のことにはふれず精神科
 常識でわかると教えては呉れず
 非常識給仕横目で見て通り
 威張つて見たがくの字が曲りまき
 回り椅子社長は威張るわけなし
 威張る役ボスの子がする童話劇
 尻もちをく程威張つて見せる孫
 威張つてる歌は一センチ背が高い
 威張つた教師も孫に手を引かれ
 新課長靴音までも威張つて居

久米雄 三六 胡風 芳月 東岸 淨美 照路 宗義 秋月 一声 桃里 あやめ 真奇 伊久野 秀代 三六 良子 陶

川維 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

またのぞき松八千に架けた橋
 橋からは郡か違うと道しるべ
 助産婦が畦道伝いの急ぎ足
 つり橋にゆられスリルの紅葉狩
 夕景の土橋を渡る子守唄
 長かった二人を結ぶ菊が咲き
 噂ふと刃物のように胸をさし
 仏壇の写真にすまぬ噂あり
 税金と言わず市長のかけた橋
 噂だけ残し左遷の荷をからみ
 道菜と見られて菊の出来を恥
 会場に重思のよう菊が着き
 床の間で菊は国花の気品もち

治基 佳仙 祥月 晃男 清泉 可明 二正 德夢 綾美

川維 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄報

やけ酒を暖簾の外で妻は待ち
 やけ酒と知らず盃くみかわし
 禁酒した夫へ罪な歳暮が来
 ひとり言未だ決断がつかぬなり
 香水に意味をふくめて恋仇
 ひとり言秘密を他人に聞きたら
 停年の床がさびしい年の暮
 香水にほりをかぶった世帯すれ
 思い出すように姑のひとり言
 やけ酒の後で誕生日とわかり
 つんとした夫人が歳暮へ改まり
 全快の箸舌でなめ舌でなめ
 お歳暮という名の欲がとどけられ
 香水の匂わぬ妻でいる師走

英夫 三夏子 餡ん坊 哲郎 博友 佐加恵 宗義 照路 美舟 幽谷 胡風 鮫虎狼 葵丘 秋月

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区深藏町5 (351)9373代
 支局 東京都千代田区神田錦治町2 (291)9629代
 名古屋市昭和区村田町2 (88)9069

やけ酒のものは彼氏が結婚し 東岸
ひとり言夜道へ月が上って来 久米雄
川 雑
米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

石橋を叩いた株がまた下り 無閑
尾行する途中でパンクしてしま 雄々
アパッチが出そうな椰子の浜を行き 蛙眼子
稲束に神武以来という重み 一保
権力へ小さく教師本を読む 虞究
年賀状代議士だからほっておき 素瓢
マルクスのマの字くらいで委員長 鶴丸
結婚の話へ秋の空高く 天邪鬼
すし詰でよし入りたい有名校 詩郎
妻と子は別な恨みの雨が降り 一機
化粧品はこりかむって倦怠期 秀峰
奥さんによるしくという耳ざわり 布堂
ハイヒールはけば主より高くなり まさよ
発車したとたん見送り大あくび 一男

川 雑
土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

水争いも忘れて農作祝い あい 勝子
豊作を雀同志も話し合い 大柳
豊作で息子バイクを買う話 勝喜
デートするチャンス追われる年の暮 天花
少々の風邪なら起る年の暮 幸葉
年の暮今更夫あてにせず 周一
ポーナスは握っておれぬ年の暮 斐山
年の暮慌てぬ度胸を羨まれ 寛
徹夜でも仕上げる暮の賃仕事 松風

母さんの声高くなる年の暮 利子
新葉へそれぞれ虫が生き残り 健一
入知恵をされた話は理につまり 柳翠
手さぐりに灯し私だけの部屋 是る江
わからない洋画わかった顔して見 十面子
安ラリーそれでも主任の胸をはり 康之介

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

欠航で湧いた港の後始末 正堂
欠航はすまない顔もしておらず 圭水
集金も出来て欠航飲むとする 宏子
欠航で宿でみみちい食事取り 句念坊
欠航で二人の幸もう狂い 和郎
欠航で淡路の姿もう見え 路郎

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

先生のあだなをつける才があり きはち
先生を友達にして 昭和の子 八郎
先生の必死へ啞のアイウエオ 六竜子
先生も吾が子に迷う 聴診器 花梢
えくぼさあはたに見える頃になり 尚
値上りで倍増政策いやになり 赤人
虫のいい他人の嫌気で儲ける気 栄一郎
捨て鉢の仲間とワマガ合う落ち目 柳柳堂
迷宮入りの謎がとけたは仲間割れ 雄声
出世した仲間をけなしふと淋し 美代
折込みの部数増えるも歳の暮 日出男
成る様にしか成らぬをよかよねする 吉太郎
除夜の鐘去り行く年を惜しむつ 静林庵

明和研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

土の上に仮死状態の絵を画きぬ 葉平
血脈の如く沃土に川流る 薫風子
土に親しみ短気いつしが消えている 菁風
土塊コロロダンブは人を押し殺し 舟遊
壇輪に思いをこらすガラスの冷たき感触 すゝむ
土の貌をコールタールで塗りつぶす 晃
南風土の香りを運んで来 悠紀
春はそこにわが心にも土を盛る 梅柿
土を築に描き画家孤独 三窓
全身に土を浴びつつ盗塁す 行人
拓く人拓かれる土黙々と 新子
芽をふくむ草にみじんの嘘もなし 千尋
デイトする度に話は家のこと 一極
受験の子へ妻(こま)まご気をつかい 六竜子
くちぐせのように受験の子を案じ 曙蝶
ゆつりと寝かせてやりたい受験の子 寿栄
唇とバランスとれぬ顔で立ち 三舟
バランスがとれず酔う父にくまれず 輝尾
バランスが崩れて男めしを炊き 幸
生きているが大きなのぞみ肺を切る 牧人
人類の希望へナント核実験 梅志
家をもわたい希望人まなみに抱き 一掬
手甲して椿油を背負いゆく 大丘子
苔寺の青に引き立つ紅椿 静馬
椿咲く鳥のあんこを撒つて去に 柳雪
旅戻り椿もいつか落ちつくし 言也
知覚分析その物の本質を知る 草人

諫早句会 (諫早市)

川岡蠶眼子報

世界の目空向いた儘お正月 英子
ふりだしに坐す日円かに屠蘇の膳 タツエ
老眼鏡の奥に馳走の太く見え イワ
明治まだ若く昭和の屠蘇に着き 薫風
年々に宇宙縮まる今朝の新春 竜泉
年明の希望は宇宙拓く夢 一步
五輪にも近まる太陽初日の出 雄三
ファイトの熱一入に初日の出 允守
ふりだしに坐す元旦の榎模様 能理子
ヒーフーミ日本は羽根を打あける 多加子
共稼ぎ馳走の山の笑いかけ 美寿栄
空へ延ぶ歴史新たな年が明け 蠶眼子
ロケットを打込まれても出る初日 同

宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

大萬

料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL(七七)三九三三番
館の店 アベノ橋近映地下食通街
TEL(七七)〇一四七番
串の店 南区豊屋町三ツ寺セブン
TEL(三三)九一八四番



お芽出度う会

写真説明一両つて右から生々庵・いわを・柳安子・竹
 莊・栄・一人置いて香葉・愛二・一人置いて路郎・
 飯乃・芳吾・文郎・一人置いて東風子・小石・静馬・一人置いて
 古方の諸氏(生々庵厨にて)

柳 樽 室

路 郎 生

★新年号は歳末の二十七日に
 発送が出来、ホッととして新年
 を迎えた。★しかし私は歳末
 のオバーワークがたまった
 のか、元日から疲労気味で、

屠蘇も寝台の上へ運んでもら
 い、午後三時にベッドを放
 り、四時から生々庵居で催さ
 れるお芽出度う会へ辛じて顔
 を出した始末。★会は洞友の
 愛二君や新任理事の静馬
 君、柳安子君の新顔を加えて
 明るい元日を迎えることが出
 来た。盛んに、祝盃が重ねら
 れるにつれ、歓談が交わされ
 れ、余興がくりひろげられ
 た。私ら夫妻は記念撮影がす
 んだのでそれを機会に中坐し
 た。帰宅したら七時だった。

★全国の柳人の皆さんから沢
 山賀状をいただいたことを揮
 謝する。私は暮の廿六、廿
 七、廿八の三日間、昼夜兼行
 で賀状を書いたが、郵便の廿
 八日ぎりぎりまで打ち切ったの
 で多くの方々に失礼をしたと
 思う。ご寛容のほどを。★私
 のことしは大変忙しいことを
 覚悟している。来年が喜寿だ
 から、一応八十までと見て

も、正味四年ほどしかない。
 幾ら回顧ぎらいの私でも、多
 少のつずめはつけて置きた
 い。あれもやっておきたい
 こともやっておきたいとな
 るとほやほやしてはいられな
 い。★雑誌の方は幸い従来の

健筆陣に加えて、更に柳友の
 執筆応援の内諾やら、予約や
 らがあるので、ますます堅実
 なアップデートの雑誌として
 ご期待が願えると思う。た
 だし、雑誌ばかりは愛読者の後
 り桶がない限り永続性がない
 ので、層一層のご支援をお願
 いする。★ことしの春は例年
 に比して遙に寒い。各地から

猛雪の便りが頻りて、珍らし
 く大阪まで積雪を見た。シッ
 カリしろという天の声かも知
 れない。終りに皆さんのご健
 在を祈って筆をおく。

▼寒い！大阪にも雪が降っ
 た。▼皆様お元気ですか。北
 国の方はたいへんなことと思
 います。▼主幹の「川柳と世
 相について」の原稿を読ん
 で、ブツブツ言っている地方
 誌があったが、路郎主幹の川
 柳への情熱を知らぬ人の言
 草で、そんな人間がいるから
 あの記事を書かれたのだと思
 います。▼今年も二月号は執

筆の諸先生のおかげでコックの
 ある柳誌になりました。有難
 う。▼本年の歌会始めにまた
 盗作があった。こんどの盗作
 者も師をもつていなかった。

師をもたぬから、なんでも無
 責任に行動ができるのだ。明
 治生まれにもこういうテア
 イがいるから「今どきの若い人
 は……」なんてことも言えな
 くなる。▼とにかく勉強する
 こと。われわれは勉強する以
 外に手がないのである。ウヌ
 ボレはいけないと思う。

豪雪禍地方の方々に御見舞
 申し上げます。
 (二三夫)

★二月句会——川雑支部
 ★京都句会・16日(土)夕
 題、薄紅・摺む・煎餅、所、
 四糸縄手仲源寺、★明和研究
 句会・10日(日)一時、題、
 節分・水河・さいころ、所、
 阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公
 民館。★南海電鉄句会・21日
 (木)六時、題、改札・一
 分・泣きどころ、所、難波親
 和クラブ、★玉造句会・11日
 (月)七時、題、雪山、拗ね
 る・感謝・住吉神社、所、市
 電玉造交又点南百米西側大阪
 信用金庫。★阿倍野句会・20
 日(水)七時、題、如才・ほ
 とほり・魅力・ゲレンデ、
 所、阿倍野区松崎町三ノ一〇
 割烹大寓。



ROYAL JELLY

ドイツ・マック社製

強力 ローヤル・ゼリー 製剤

活力を高める

強精と長生への天然の強壯効果

日本新薬株式会社



正式名 アピフォルティール

新 神経疲労回復剤！

バランス



神経も
レジャーがほしい！

●はげしい頭脳労働のため、思考力に疲れをお覚えの方
●お仕事が思うようにゆかなくて、イライラしておいでの方
●重要な交渉、商談などをひかえて不安なお気持ちの方
●ぜひ、バランスをおのみください。

〔新 発売〕



山之内製薬株式会社
東京都中央区日本橋本町2ノ5
大阪・福岡・札幌・名古屋

- 一〇ミリグラム 二〇〇円
 - 六カプセル 三三〇円
 - 二カプセル 八〇〇円
 - 三〇カプセル (はかに医家向大入) 一、八〇〇円
- お申し込み、説明書・試供品を
送呈

川柳集

有情

好評噴々！限定出版ですからなくならないうちにお求め
橘高薫風子著 麻生路郎序

下さい。著者は新進作家で、繊細な新感覚の持主である。川柳雑誌社発行。

定価二百五十円 送料六〇円

東野大八著

風流 人間横丁

B 6型 二五八頁

価250円 送料70円

★異常な競争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバランスな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄く、まるで腕の冴えた夜場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

高鷲亜鈍著

詩川柳考

B 6型函入 定価三百八十円 送料九〇円

★著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であったがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した。今川柳界にあって庶民の詩人の自覚を促すことに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る一見その前向作家を自負する柳俳人必読の書

若本多久志著 麻生路郎序

川柳 親ごころ子心

価150円 送料50円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳塔の中から親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書である。掲載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知ることの出来る実に有意義な書である。

★ご送金は振替口座をご利用が便利です。安全です。(切手代用可)

川柳雑誌社

振替口座大阪75050
電話 大阪 〇〇 6081

大阪市住吉局区内
万代西5丁目25

発行所

募 集

課題吟募集

朝角 尼緑之助 選
勝ち 友淵貴山 選
旭 内藤きさ子 選
(二月十五日締切)

口下手 清水白柳 選
善意 (不月以迄) 後藤梅志 選
腕組み (不月以迄) 小浜牧人 選
(三月十五日締切)

毎号募集

近作柳塔 (不月以迄) 麻生路郎 選
川柳塔 (不月以迄) 北川春巢 選
文章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎 選
(毎月十五日締切)

投稿規定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼ 「近作柳塔」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「課題吟」は誰でも投句が出来る。
▼ 「川柳塔」の投句は不朽副会員に限る。

川柳雑誌

B列5号 毎月一回一日発行
第三十八年 第二号
定価 九〇円 (送料六円)

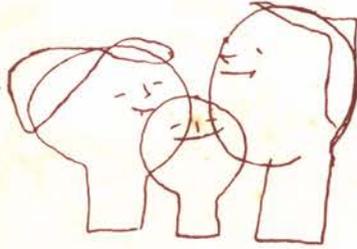
(禁転載)
半力年 五七六円 千 共
一力年 一〇八〇円 千 共
昭和三十八年二月廿五日 印刷
昭和三十八年二月一日 発行
大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地
川柳雑誌社 麻生路郎 二部

川柳雑誌社

発行所 川柳雑誌社
振替口座大阪75050
電話 大阪 〇〇 6081
大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地

Printed in Japan

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2

疲れをとり
抵抗力の強い
からだをつくる

高単位総合ビタミン・ミネラル剤

ポポン-S

20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円



塩野義製薬株式会社

麻生路郎著

好評噴々

竹川柳盤賞

川柳の味わい方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にして他の柳誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

大阪市住吉区西五丁目二五番地

発行所

川柳雑誌社

電話大阪671-1608
本社口座 大阪671-5050

価二五〇円

送費八〇円

B6版

二五〇余頁

麻生路郎先生著

川柳とは何か

価二五〇円
送費七〇円

川柳の作り方と味わい方

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたものもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿八年二月一日発行(毎月一回一日発行)

編集者 麻生路郎
発行印刷人 川柳雑誌社

麻生路郎 発行所

川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目二五番地 電話大阪671-1608

本社口座 大阪671-5050

定価九十円(送料六円)